

## 第1章 歴史的風致形成の背景

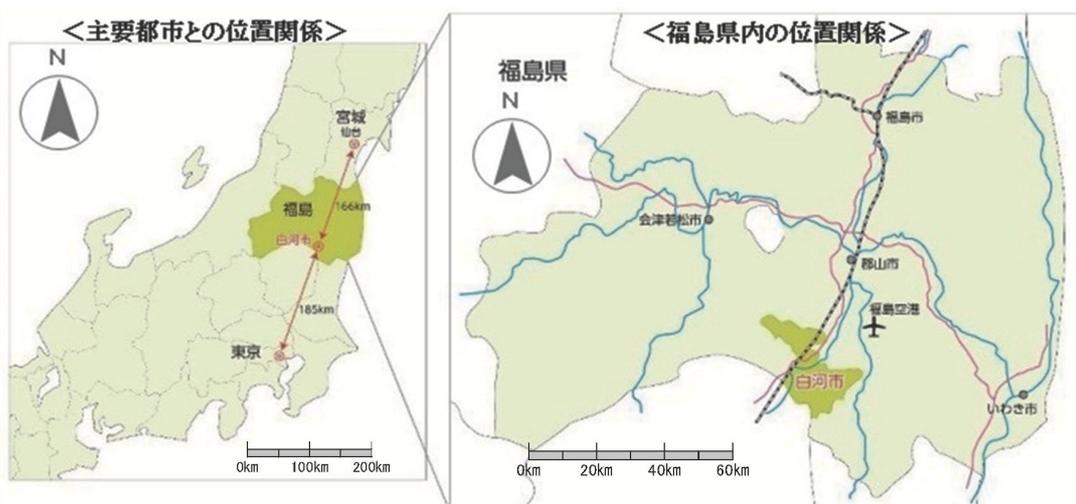
## 1. 自然的環境

## (1) 位置

本市は、福島県の南部中央に位置し、東は<sup>やぶきまち いずみざきむら なかじまむら いしかわまち あさかわまち</sup>矢吹町・泉崎村・中島村・石川町・浅川町、西は<sup>にしごうむら てんえいむら たなぐらまち とちぎけん なすまち</sup>西郷村、北は天栄村、南は<sup>たなぐらまち とちぎけん なすまち</sup>棚倉町・栃木県那須町に接している。市の中心部から福島市まで約90km、<sup>こおりやまし</sup>郡山市まで約40kmの距離にある。また、東京までは約185kmで、新幹線で約1時間20分の距離にある。

現在の市域は、平成17年（2005）に合併した白河地域（旧白河市）、表郷地域（旧表郷村）、大信地域（旧大信村）、東地域（旧東村）の4地域で構成されている。東西は約30km、南北は約30kmにわたり、総面積305.32km<sup>2</sup>の約半分を山林が占めている。

市役所本庁舎所在地は、北緯37度7分35秒、東経140度12分39秒に位置する。



## 第1章

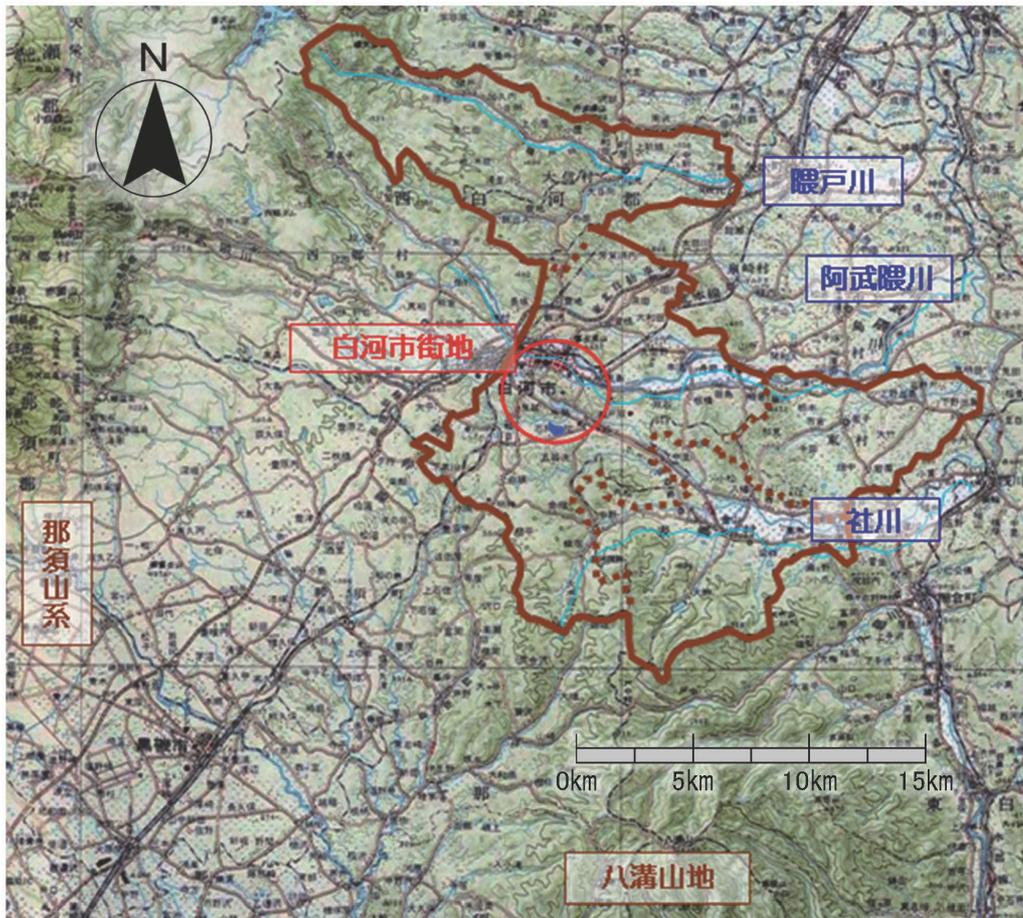
### (2) 地形・地質

本市の面積は305.32km<sup>2</sup>で、田園風景が広がる海拔300～400mの平地と400～600mの丘陵・山岳地帯で大部分が形成されており、最高標高は大信地域西北端にある権太倉山<sup>ごんたくらやま</sup>の976.3mとなっている。

西に那須山系<sup>なすさんち</sup>、南には八溝山地<sup>やみぞさんち</sup>が連なり、1級河川には白河地域中心部から東地域北部に流れる阿武隈川<sup>あぶくまがわ</sup>や表郷地域<sup>やしるがわ</sup>を東西に流れる社川<sup>くまどがわ</sup>、大信地域<sup>たいしん</sup>を東西に流れる隈戸川<sup>くまどがわ</sup>などがある。これらの豊かな緑と水に囲まれた標高300～1,000mにある高原地帯で、阿武隈川の源として那須山系が蓄えた清冽な水が豊富な土地柄である。

阿武隈川の河川流域を中心に市街地が形成されているが、特に市域北東部の阿武隈川流域には広大な農地等が広がり、森林地帯がこれらを包み込んでいる。

市街地や既存集落地からは、那須山系、八溝山地がスカイラインを形づくっており、特に既存集落地においては、河川と水田及び里山により郷土的な景観や自然的環境が保全されている。



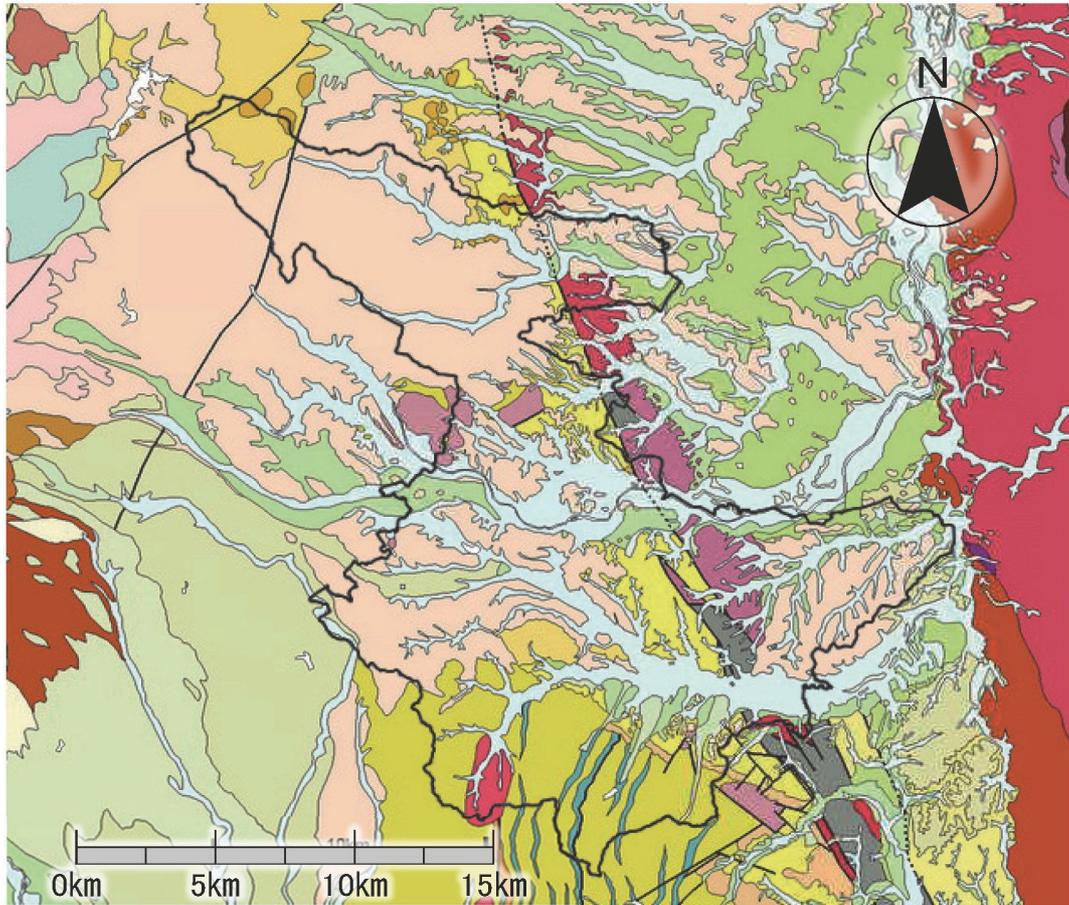
白河市周辺地形図

白河市の地質は、もっとも古い時代のものは、約2億年前の中生代ジュラ紀までさかのぼり、この時代を示す砂岩やチャートなどの堆積岩とそれに貫入する中生代白亜紀の花崗岩が白河市南部の八溝山地を中心とした地域に分布している（八溝層群）。

白河市北部を中心とした地域には、海底の火山活動によって形成された新第三紀中新世のグリーンタフ（緑色凝灰岩）からなる小田川層が分布している。

第三紀末からは隆起がはじまり、第四紀に入ると隆起部での火山活動が激しくなった。市の北部を中心とした地域には、古い那須山の二岐山付近を中心にした噴火の火砕流堆積物から成る石英安山岩質溶結凝灰岩が分布している（白河層）。この凝灰岩は「白河石」と呼ばれ、小峰城の石垣をはじめ、石塔や石灯籠、墓石など、市内の各地で石材として利用されている。

更新世の半ばからは、阿武隈川<sup>あぶくまがわ</sup>とその支流の浸食とその後の砂礫の堆積により、河岸段丘が形成された。現在、この段丘面が住宅地や農地として利用されている。



白河市周辺の地質図

【凡例】

J24-K11_sx_J3	中生代 中期ジュラ紀 カロビアン期～前期白亜紀パレミアン期 混在岩 後期ジュラ紀-前期白亜紀付加体	N1_vas_al	新生代 第三紀 中新世 バーディガリアン期～前期ランギアン期前期 デイサイト・流紋岩 大規模火砕流
J24-K11_soss_J3	中生代 中期ジュラ紀 カロビアン期～前期白亜紀パレミアン期 海成層 砂岩 後期ジュラ紀-前期白亜紀付加体	N1_sbc	新生代 第三紀 中新世 バーディガリアン期～前期ランギアン期前期 汽水成層ないし海成・非海成混合層 礫岩
J24-K11_som_J3	中生代 中期ジュラ紀 カロビアン期～前期白亜紀パレミアン期 海成層 泥岩 後期ジュラ紀-前期白亜紀付加体	Q12_vas_ap	新生代 第四紀 更新世 カラブリアン期 デイサイト・流紋岩 大規模火砕流
K12_pim_a	中生代 前期白亜紀 ワプチアン期～アルビアン期 花崗閃緑岩・トータル岩 塊状 島孤・大陸	Q31_std	新生代 第四紀 後期更新世前期 段丘堆積物
K12_pin_a	中生代 前期白亜紀 アプチアン期～アルビアン期 花崗閃緑岩・トータル岩 片麻状 島孤・大陸	Q32_33_std	新生代 第四紀 後期更新世中期～後期更新世後期 段丘堆積物
K22_pam_a	中生代 後期白亜紀 カンパニアン期～マーストリヒチアン期 花崗岩 塊状 島孤・大陸	Q33-H_sfd	新生代 第四紀 後期更新世後期～完新世 扇状地・崖錐堆積物
K22_pim_a	中生代 後期白亜紀 カンパニアン期～マーストリヒチアン期 花崗閃緑岩・トータル岩 塊状 島孤・大陸	H_sad	新生代 第四紀 完新世 谷底平野・山間盆地・河川・海岸平野堆積物
N1_sbs	新生代 第三紀 中新世 バーディガリアン期～前期ランギアン期前期 汽水成層ないし海成・非海成混合層 砂岩・砂岩泥岩互層ないし砂岩・泥岩	Q2_V_ad	新生代 第四紀 中期完新世 火山岩 岩屑なだれ堆積物
N1_vis_al	新生代 第三紀 中新世 バーディガリアン期～前期ランギアン期前期 安山岩・玄武岩質安山岩溶岩・火砕岩		

(資料: 国立研究開発法人産業技術総合研究所 地質図Navi)

### (3) 気象

本市の気候は、夏は涼しく、冬は季節風の影響で寒さが厳しいが積雪量は少ない。

平成27年（2015）から令和元年（2019）までの期間における統計では、年間平均気温は12.4℃、最高気温は平成27年（2015）8月の35.9℃、最低気温は平成30年（2018）1月の-10.3℃であり、年間平均降水量は1,424mmとなっている。

また、月別の気象では、8月の平均気温が最も高く23.9℃、1月の平均気温が最も低く0.8℃であり、降水量が最も多いのは10月の214.2mm、次いで9月の211.0mmとなっている。



## 2. 社会的環境

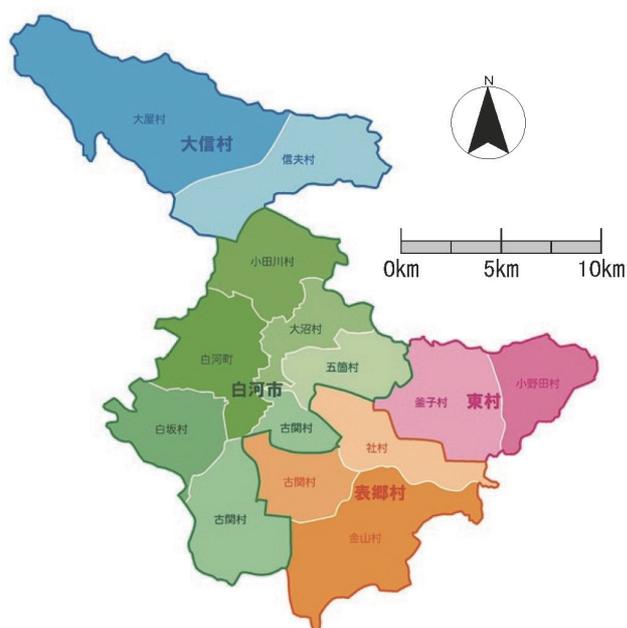
### (1) 白河市の変遷

明治22年（1889）4月に、町村制施行により「<sup>しらかわまち</sup>白河町」が成立した。当時の町の人口は約1万1,000人であった。同時に表郷地域には<sup>かねやまむら</sup>金山村・<sup>やしろむら</sup>社村・<sup>こせきむら</sup>古関村が、大信地域には<sup>たいしん</sup>信夫村・<sup>しのぶ</sup>大屋村が、東地域には<sup>おのだむら</sup>小野田村・<sup>かまのごむら</sup>釜子村がそれぞれ合併により誕生した。

昭和24年（1949）4月、白河町は<sup>おおぬまむら</sup>大沼村と合併して市制を施行、のちに<sup>しらさかむら</sup>白坂村・<sup>こたがわむら</sup>小田川村と合併し、昭和30年（1955）の3月に<sup>ごかむら</sup>五箇村、8月に表郷村の一部を編入して旧白河市の枠組みが形作られた。

昭和30年（1955）に表郷地域で金山村・社村・古関村の3村が合併して「表郷村」が成立、大信地域では信夫村・大屋村の2村が合併し「大信村」が、東地域では小野田村・釜子村の2村が合併し「東村」が成立した。

昭和44年（1969）には、白河市・表郷村・大信村・東村を含む西白河郡の1市1町6村が県内で初めて「広域市町村圏」の指定を受け、翌45年（1970）には<sup>ひがししらかわぐん</sup>東白川郡の3町1



合併前後の市町村範囲

## 第1章

---

村を加え、県南地方の均衡ある発展を目指した。

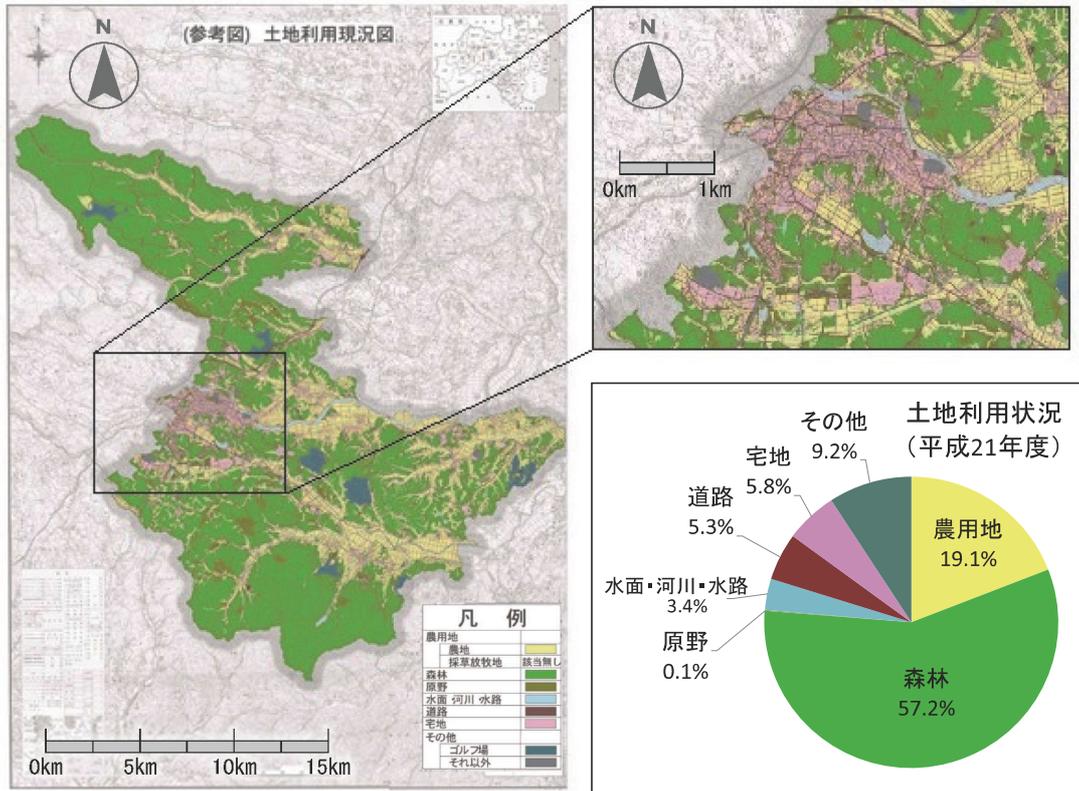
そして平成17年（2005）11月7日、白河市・表郷村・大信村・東村が合併し、新たな「白河市」が誕生した。なお、現在は合併前の旧市村を地域単位とし、白河地域、表郷地域、大信地域、東地域と呼んでいる。



## 第1章

### (2) 土地利用

本市の市域面積は、305.32km<sup>2</sup>であり、森林の57.2%と農地の19.1%を合わせると、全体の4分の3以上を占める。また、宅地が全体に占める割合は5.8%程度となっている。

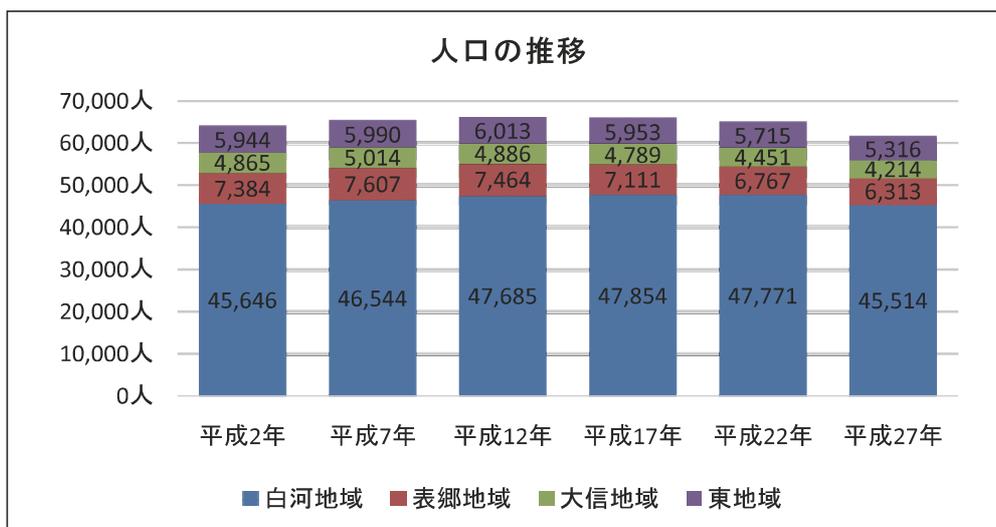


資料：白河市国土利用計画

### (3) 人口動態

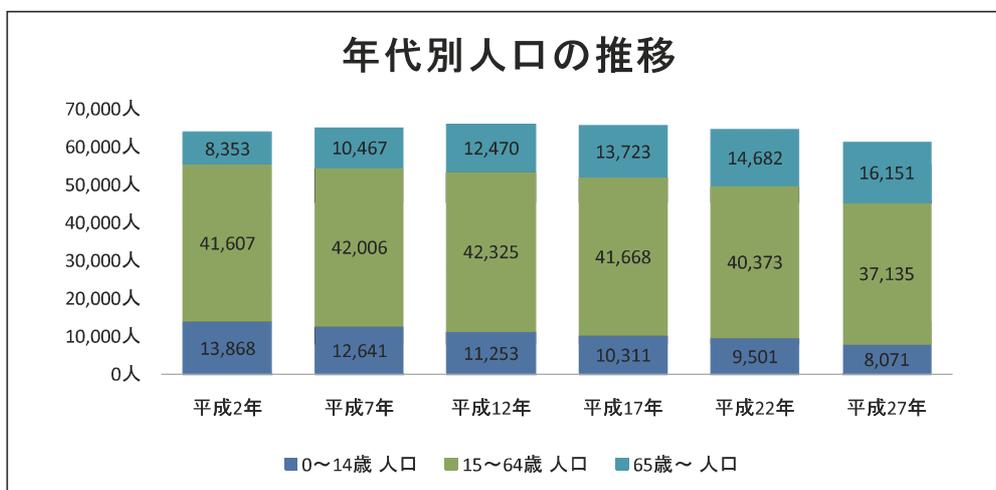
平成27年（2015）の本市の人口は61,913人で、平成2年（1990）から平成27年（2015）までの期間における国勢調査結果によると、平成12年（2000）までは人口が増加傾向にあったが、平成17年（2005）以降は減少に転じている。

また、年齢別人口の推移については、0～14歳の年少人口と15～64歳の生産年齢人口が減少しているのに対し、65歳以上の老年人口が増加しており、少子高齢化の傾向が顕著に見られる。



	平成2年	平成7年	平成12年	平成17年	平成22年	平成27年
白河地域	45,646	46,544	47,685	47,854	47,771	45,514
表郷地域	7,384	7,607	7,464	7,111	6,767	6,313
大信地域	4,865	5,014	4,886	4,789	4,451	4,214
東地域	5,944	5,990	6,013	5,953	5,715	5,316
総人口	63,839	65,155	66,048	65,707	64,704	61,913

(単位：人)  
資料：国勢調査



年齢別		平成2年	平成7年	平成12年	平成17年	平成22年	平成27年
0～14歳	人口	13,868	12,641	11,253	10,311	9,501	8,071
	割合	21.7%	19.4%	17.0%	15.7%	14.7%	13.0%
15～64歳	人口	41,607	42,006	42,325	41,668	40,373	37,135
	割合	65.2%	64.5%	64.1%	63.4%	62.4%	60.0%
65歳～	人口	8,353	10,467	12,470	13,723	14,682	16,151
	割合	13.1%	16.1%	18.9%	20.9%	22.7%	26.1%
人口合計		63,828	65,114	66,048	65,702	64,556	61,357

※年齢不詳を除く

(単位：人)  
資料：国勢調査



年齢別		令和2年	令和7年	令和12年	令和17年	令和22年
0～14歳	人口	7,185	6,609	6,131	5,709	5,363
	割合	12.1%	11.5%	11.1%	10.8%	10.7%
15～64歳	人口	34,641	32,219	30,318	28,482	26,135
	割合	58.1%	56.0%	54.7%	53.7%	51.9%
65歳～	人口	17,776	18,720	18,931	18,799	18,823
	割合	29.8%	32.5%	34.2%	35.5%	37.4%
人口合計		59,602	57,548	55,380	52,990	50,321

(単位: 人)

資料: 白河市人口ビジョン (国立社会保障・人口問題研究所) を基に独自推計

#### (4) 交通機関

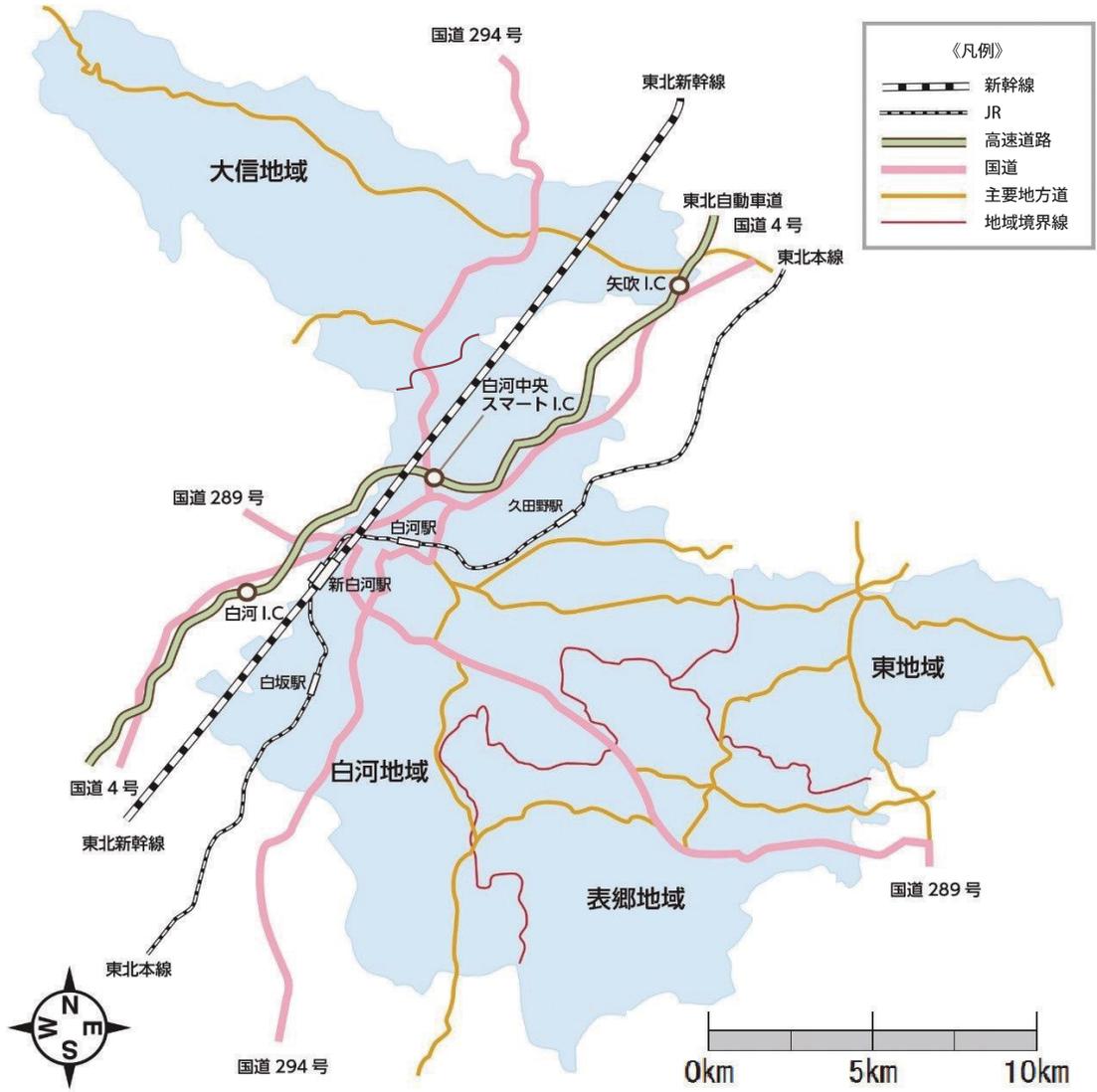
主要な道路網については、南北に縦断する形で国道294号（千葉県柏市～福島県会津若松市）及び国道4号（東京都中央区～青森県青森市）が、東西に横断する形で国道289号（新潟県新潟市～福島県いわき市）が伸び、国道4号に沿うように東北自動車道が走っている。また、平成26年（2014）度より、白河市街地を南北に縦断する国道294号白河バイパスの整備が始まり、開通により今後さらなる利便性向上が見込まれる。

路線バスについては、福島交通・JRバス関東が、白河駅や新白河駅を中心として市内各所を結んでいるほか、各地域では白河市循環バスや表郷地域巡回バス、大信地域自主運行バス、東地域巡回バスといったコミュニティバスが運行され、鉄道駅や医療施設・商業施設、市役所・庁舎などを結んでいる。

鉄道は、白河駅・白坂駅・久田野駅の3駅があり、JR東北本線（東京都千代田区～岩手県盛岡市）が通っている。また、東北新幹線（東京都千代田区～青森県青森市）の停車駅である新白河駅（西郷村）が近く、首都圏への利便性がよい。

本市の主要な交通網

▶ 主要な道路・交通網

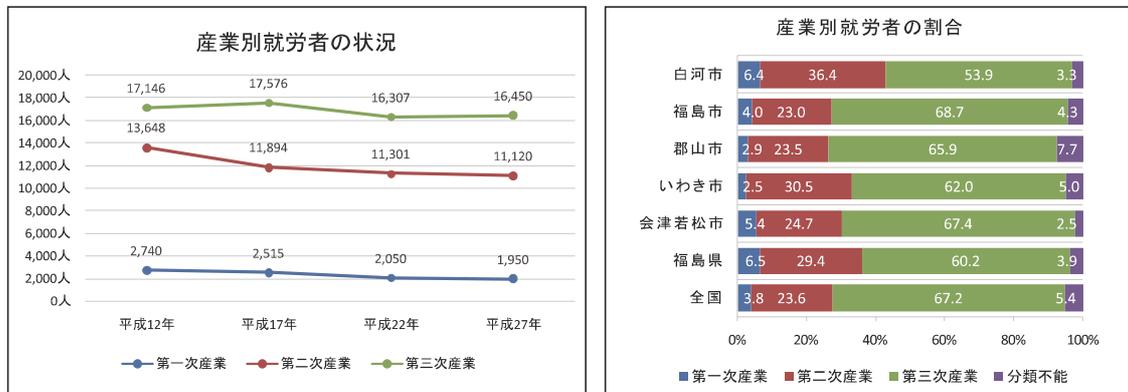


(5) 産業

本市は、県内有数の製造品出荷額を誇る工業を基幹的産業として、農業、商業など多様な産業が展開されている。

産業別就労者の状況については、第1次産業・第2次産業の就労者数が減少傾向となっていたが、平成22年（2010）から平成27年（2015）では下げ止まりの兆候が見られる。

産業別就労者の割合では、第2次産業が全体の3割以上を占め、全国平均や福島県平均を大きく上回っている。これは、白河・表郷・大信・東の各地域で工業団地が整備され、市内各所に立地する工場等が第2次産業の就業の場となっているためである。また、第1次産業についても、県平均には及ばないものの、県内の人口上位4都市と比べると高い状況となっている。



資料：国勢調査

(6) 観光

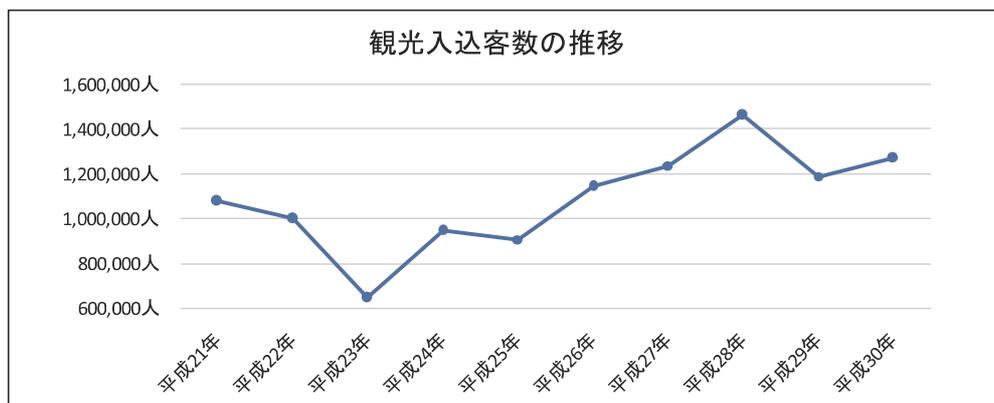
本市は、「みちのくの玄関口」として知られ、白河関跡や南湖公園、小峰城跡に代表される歴史的遺産と豊かな自然に囲まれている。また、白河提灯まつり（鹿嶋神社例大祭）や白河だるま市（市神祭）などの祭礼行事、白河そばや白河ラーメンなどの粉物食文化も継承され、豊富な地域資源を有している。

平成21年（2009）から平成30年（2018）までの観光入込客数の推移を見ると、東日本大震災が発生した平成23年（2011）は大幅に減少したものの、平成25年（2013）から平成28年（2016）にかけ増加し、現在は震災前の水準を上回って推移している。

南北朝時代に結城親朝により築かれた小峰城をはじめ、松平定信が築造した南湖、多くの和歌に詠まれた歌枕として名高い白河関は、本市を代表する歴史遺産として多くの観光客が訪れ、とくに南湖公園の入込客数は本市の総入込客数の約4割を占めている。

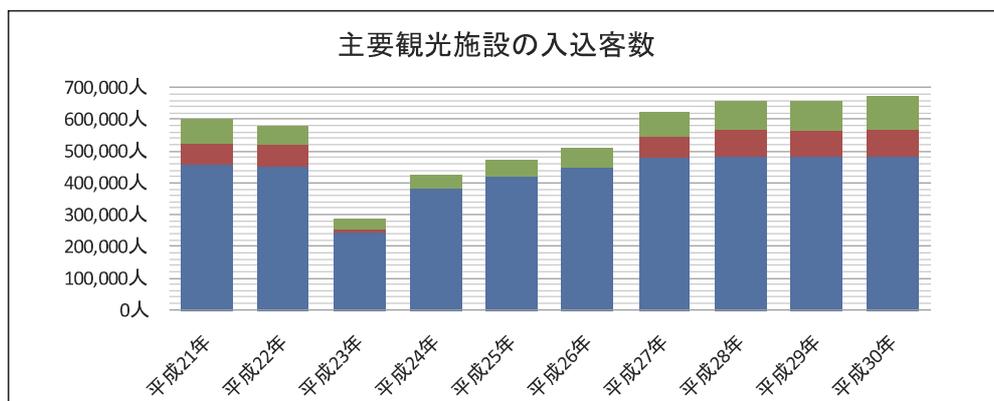
このことから、白河藩主である松平定信が「士民共楽」の理念を掲げて築造した南湖が、1年を通じて楽しむことができる行楽の地として多くの人に愛されてきたことが分かる。

イベントに関しては、例年2月11日に開催される白河だるま市や、隔年9月に開催される白河提灯まつりといった年中行事や祭礼に加え、平成26年（2014）から開催されているしらかわキャラ市等、テーマに沿ったイベントが多数行われている。



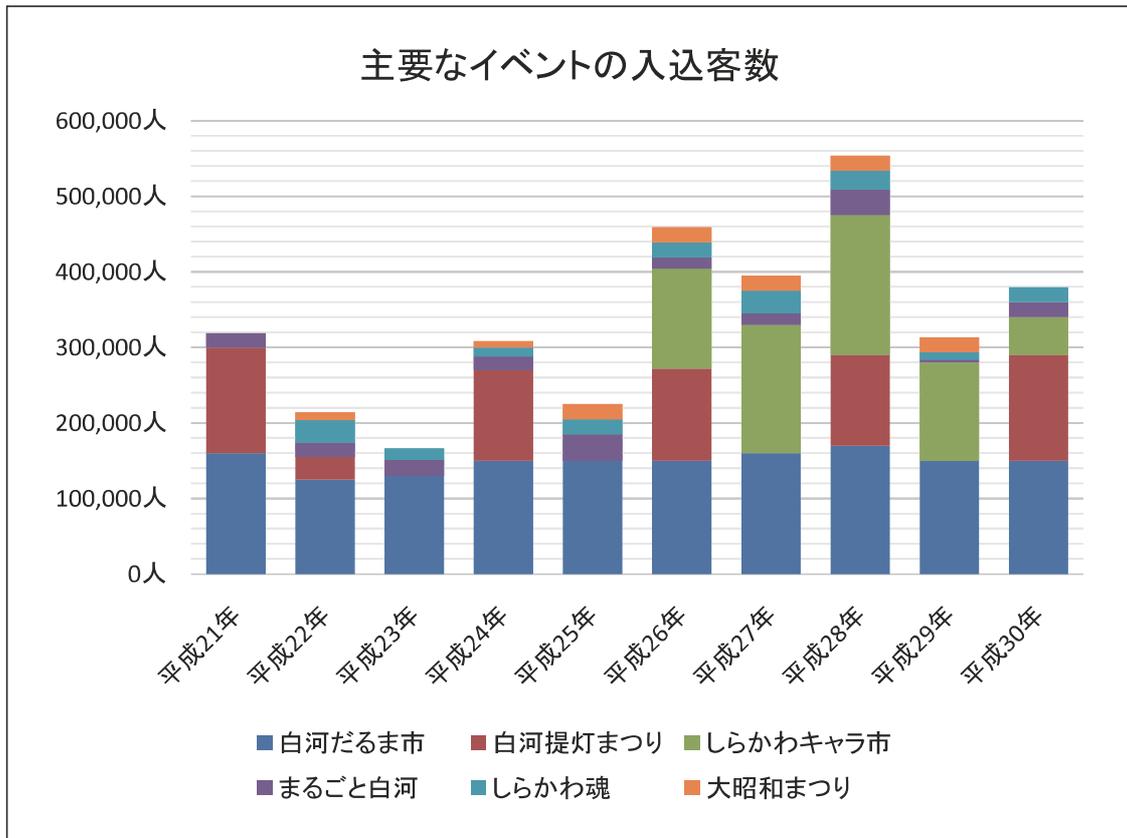
(単位：人)

資料：福島県商工労働部観光交流局観光交流課「福島県観光客入込状況」



(単位：人)

資料：福島県商工労働部観光交流局観光交流課「福島県観光客入込状況」



年	平成21年	平成22年	平成23年	平成24年	平成25年	平成26年	平成27年	平成28年	平成29年	平成30年
白河だるま市	160,000	125,000	130,000	150,000	150,000	150,000	160,000	170,000	150,000	150,000
白河提灯まつり	140,000	30,000	-	120,000	-	122,000	-	120,000	-	140,000
しらかわキャラ市	-	-	-	-	-	132,000	170,000	185,000	130,000	50,000
まるごと白河	19,000	19,000	21,000	18,000	35,000	15,000	15,000	34,000	3,500	20,000
しらかわ魂	-	30,000	15,000	12,000	20,000	20,000	30,000	25,000	10,000	20,000
大昭和まつり	-	10,000	-	8,000	20,000	20,000	20,000	20,000	20,000	-

(単位：人)

資料：福島県商工労働部観光交流局観光交流課「福島県観光客入込状況」

### 3. 歴史的環境

#### (1) 白河の歴史

##### ① 古代の白河 ー陸奥国白河郡の成立ー

白河市街地の東部の舟田地区には、6世紀後半の古墳としては東北地方最大規模を誇る下総塚古墳（前方後円墳）が存在し、これは『国造本紀』に記された白河国造の墓である可能性が高いと考えられている。また、下総塚古墳に近接して確認された舟田中道遺跡の豪族居館跡は、出土品の推定年代から下総塚古墳被葬者の次世代を担った豪族の本拠であることが確認された。

白河市の南端旗宿の地には、国の史跡である白河関跡がある。設置された年代は、承和2年（835）の『太政官符』の「旧記ヲ検スルニ剗ヲ置キテ以来、今ニ四百余歳」の記載から推定すれば5世紀中頃とする説があるが、発掘調査の成果や文献資料から推測すると、8～9世紀の奈良・平安時代頃に機能していたと考えられる。

大化改新（大化元年（645））の後、律令制の導入とともに国・郡・里の地方行政組織が確立された。古代白河郡は17の郷から構成される陸奥国最大規模の郡で、7世紀末頃には古代白河郡衙が泉崎村関和久に設けられ、現在の借宿廃寺跡は白河郡衙の付属寺院として建立されたと考えられている。古代白河郡の範囲は、現在の白河市、西白河郡（西郷村・泉崎村・中島村・矢吹町）、東白川郡（棚倉町・矢祭町・塙町・鮫川村）、石川郡（石川町・玉川村・平田村・浅川町・古殿町）と茨城県大子町をあわせた非常に広い地域であった（『和名類聚抄』）。

平成20年（2008）に発掘された野地久保古墳は、谷地久保古墳と同時期の終末期古墳であるとともに、東北初の上円下方墳であることが判明し、白河が律令国家体制の北の要の地であったことが示された。

※東白川郡は、もともと白河郡の一部であったが、10世紀半ばまでに高野郡として分離された。高野郡は寛文年間に再び白河郡に吸収されるが、元禄年間には再度分離し、白川郡となった。その後、明治12年（1879）に白川郡から東白川郡に改称した。



下総塚古墳（前方後円墳）



白河関跡遠景

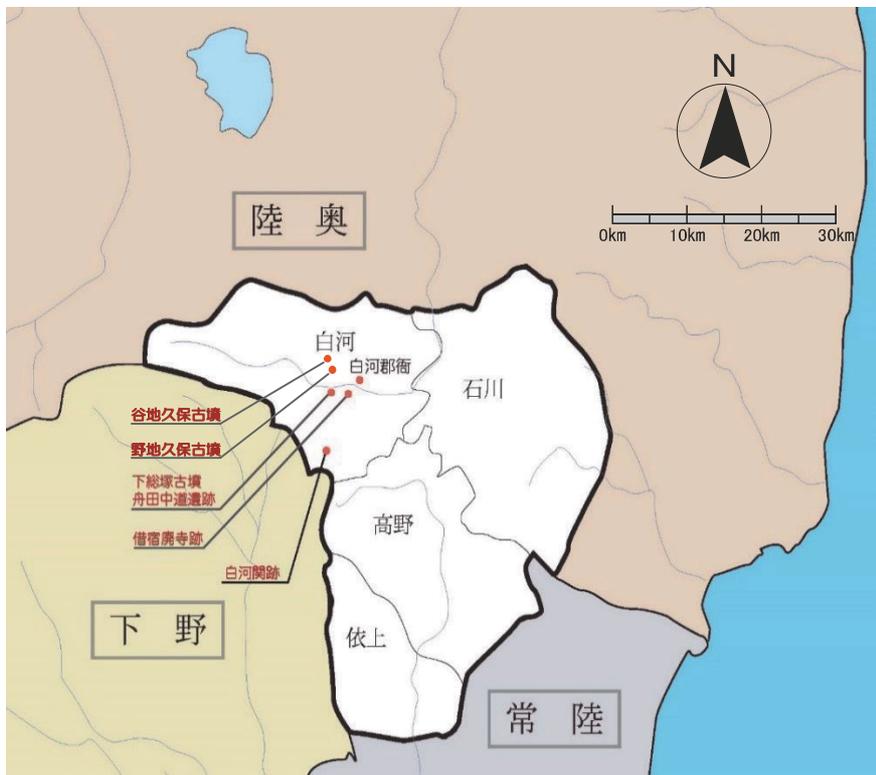


借宿廃寺跡



野地久保古墳（上円下方墳）発掘状況

10世紀に入ると、これらの官衙や関などは施設としての機能を失ったと推測されるが、  
しらかわのせきあと  
 白河関跡については、律令国家の衰退と前後するように文学の世界で歌枕として憧憬の地  
 となり、多くの歌に詠まれ続けている。



古代白河郡の範囲図

## ②中世の白河 ー白河荘の成立と白河結城家ー

古代白河郡は前述のとおり非常に広い地域であったが、律令制の衰退にともなって行政区画としての機能を失い荘園が分立し、11世紀後半から12世紀にかけて白河荘、石川荘、高野荘（のち依上保と高野郡に分裂）に分かれたと考えられている（『白河市史一』）。

白河荘は現在の白河市・西白河郡の地域に相当し、平安時代末期には藤原信頼・平重盛（清盛の長男）、後白河天皇など皇室や都の有力者の荘園になったと推定されている（「吾妻鏡」文治4年（1188）3月条）。

このようにして平安時代末期に成立した白河荘は、以後に続く鎌倉時代から南北朝時代を経て室町時代に至る「中世」の行政単位となっていた。

下総国結城郡（茨城県結城市）を本拠とする結城朝光は、源頼朝が奥州藤原氏を滅ぼした「奥州合戦」（文治5年（1189））に従軍し、戦功をあげ、白河荘を賜ったとされる（「結城家譜」ほか）。ここが、約400年に及ぶ結城家と白河の関係の起点となった。朝光は、鎌倉幕府の評定衆に就任するなど幕政に重きをなした。

鎌倉時代中期以降になると、結城家の庶子が白河に移住し始めるようになり、阿武隈川の南岸（南方）と北岸（北方）に郷村の開発を進めていったと推測されている（『白河市史一』）。



鎌倉時代後期の白河荘



結城朝光肖像（称名寺蔵）

白河結城家の祖とされる祐広（朝光の孫）は13世紀後半に白河に下向したと伝えられ、その子宗広の時代まで「白河荘南方」の地頭職として大村郷（白河市大地区）をはじめとした10程度の郷村を支配しており、一方「北方」は一族の結城盛広が富沢郷（現在の大信下小屋付近）を本拠とし、同様に10程度の郷村を支配していたとされる。

しかし、白河荘の中心である金勝寺（荒砥崎）は結城家惣領が領し、周辺の関（旗宿）・小田川・田島なども他の結城諸家が支配していた（『白河市史一』）。

このように鎌倉時代の白河荘は、結城家という武士団の一族により現在につながる郷村

## 第1章

の開発が行われていったが、この段階においては、白河結城家はまだ結城一族のうちの一家という状況であり、地域に台頭するには至っていなかった。

白河結城家が台頭するのは、<sup>すけひろ</sup>祐広の子、<sup>むねひろ</sup>宗広の時代である。宗広は、<sup>ごだい</sup>後醍醐天皇の鎌倉幕府倒幕の命に従い、鎌倉を攻める<sup>につた よしざだ</sup>新田義貞らに呼応して幕府を滅亡に追い込んだ。後醍醐天皇の信頼を得た宗広は結城家の「惣領」となるよう命じられ、天皇に反旗を翻した<sup>あし</sup>足利尊氏と戦ってこれを破り、天皇から「<sup>こうか</sup>公家（天皇家）の宝」とまで賞賛されている。

その後、天皇主導の政治（建武政権）に反感を持つ武士層を糾合して勢力を盛り返した尊氏は、後醍醐天皇を吉野に追いやり、後醍醐天皇の南朝と尊氏の北朝が対立する南北朝内乱時代を迎えるが、宗広は一貫して南朝側につき、南朝勢力の立て直しを図ろうとした。

しかし、南朝勢力の退潮により宗広の子<sup>ちかとも</sup>親朝は尊氏による北朝・武家政権への転身を図り、家の存続に腐心した。この建武元年（1334）から明德3年（1392）の約60年にわたる南北朝内乱期を経て、白河結城家は白河荘全体を掌握・領有した（『白河市史一』）。また、南朝後醍醐天皇・北朝足利尊氏の両政権から福島県中通り一帯の軍事警察権を行使する検断職に任じられ、その職権を背景に、室町時代には奥州南部から北関東にまで勢力を伸ばし、室町幕府やその出先機関である鎌倉府から南奥の雄として認識されるに至った。

南北朝内乱期を経て室町時代中期に至る時代は、白河結城家はその勢力を最大に伸ばし、北関東から南奥にかけての諸勢力の盟主的存在として君臨した時代であり、白河を中心とした南奥地域が政治的にも安定した時代であった。

政治の安定は文化の発展をもたらした。連歌師<sup>そうぎ</sup>宗祇は白河結城家の当主、<sup>なおとも</sup>直朝に招かれて白河に下った際の出来事を「白河紀行」として残しているほか、文明13年（1481）春に白河結城家の氏神、白河鹿嶋神社で行われたいわゆる「白河万句興行」は当主である<sup>まさとも</sup>政朝が催した連歌興行で、結城一門だけでなく家臣団も連歌の嗜みを身につけていたことが分かる（『白河市史一』）。

また、同社別当の<sup>さいしやうじ</sup>最勝寺に伝来した「銅造十一面観音立像」（像高：80.8cm）や「銅造十一面観音懸仏」（直径104.3cm）は室町時代に制作された銅造の作品としては東北地方でも有数の大きさであることから、製作年代や周辺の武士団の勢力など、時代的背景から白河結城家の寄進であることが確実視されるものであり、その繁栄を確認することができる貴重な文化財である。

応仁元年（1467）に起こった応仁の乱をきっかけにして全国に波及した争乱状態（戦国時代）は白河結城家にも及んだ。永正7年（1510）に起こった「永正の変」は一族の小峰家が惣領の<sup>ゆう きまさとも</sup>結城政朝を那須に追放した事件であり、小峰家の血統による新たな「白河結城家」が創設された出来事とされている（『白河市史一』）。

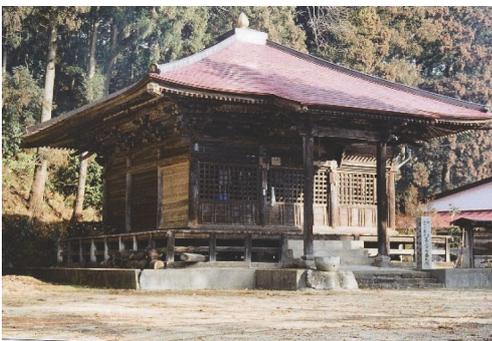
この争乱により、白河結城家の周辺勢力への影響力は弱まり、白河の南東部は常陸の佐



鹿嶋神社



銅造十一面観音懸仏（龍蔵寺蔵）



旧最勝寺観音堂



銅造十一面観音立像（龍蔵寺蔵）

竹氏、北西部は会津の<sup>あしな</sup>葦名氏、北部では<sup>だて</sup>伊達氏が勢力を拡大するとともに、白河結城家の支配領域は徐々に狭まり、佐竹氏、葦名氏を経て最終的には伊達氏に付くに至った。そして天正18年（1590）、豊臣秀吉による奥羽仕置で白河結城家は改易となり、白河結城家の白河地方の支配は幕を閉じた。

③近世の白河 ー白河藩の成立と大名変遷ー

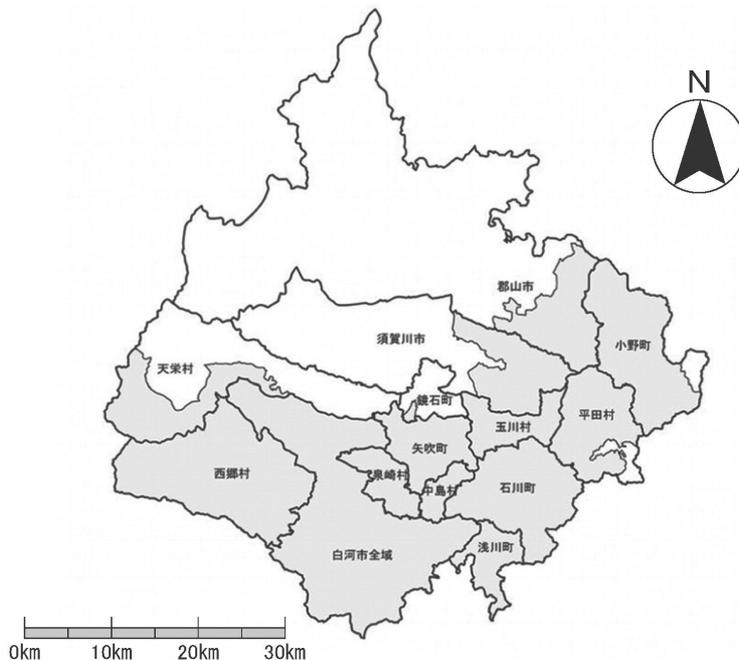
ア 白河の会津支配と白河藩の成立

白河結城家が奥羽仕置で改易されると、白河は会津を領した蒲生氏郷<sup>がもうじさと</sup>の領地となり、家臣の関一政<sup>せきかずまさ とよもり</sup>（豊盛）の支配となった。天正18年（1590）から寛永4年（1627）までの約40年にわたり、白河は会津領に組み込まれ、領主は蒲生氏ー上杉氏ー蒲生氏（再封）と変遷した。再度の蒲生時代（1601～27）に城郭の改修と町割がある程度進められた。以前から文字資料（『白河風土記』、『白河古事考』）としては城代の町野繁仍<sup>まちのしげより ゆきかず</sup>・幸和時代に城郭の改築と町割の進展が知られていたが、『白河風土記』に記載のある「慶長古図」と称される当該期の絵図の存在が確認されていなかった。しかし、近年「慶長古図」とみられる絵図（「白河城之図」宮城県図書館蔵）が発見され、城郭には土塁（一部には石垣）が巡らされ、城下町の形も基礎的な部分は成立していることが明らかとなった。

これにより、再度の蒲生時代に基礎的な城郭と町割が形成され、その形を基礎として初代白河藩主丹羽長重<sup>に わながしげ</sup>が寛永4年から同9年（1627～32）にかけて小峰城の大改修と町割の改修を行い、現在の形につながる白河の城郭と城下町が形成されたといえる。

イ 白河藩の成立と小峰城・城下町の完成

寛永4年（1627）、会津藩主蒲生忠郷<sup>がもうたださと</sup>が嗣子の無いまま死去し、領地を没収されたことにより会津藩の領地の再編がなされ、白河は10万700石をもって白河藩として独立した。この初代白河藩主となったのが丹羽長重<sup>に わながしげ</sup>である。



丹羽家時代の白河藩領図（グレー部分）10万700石

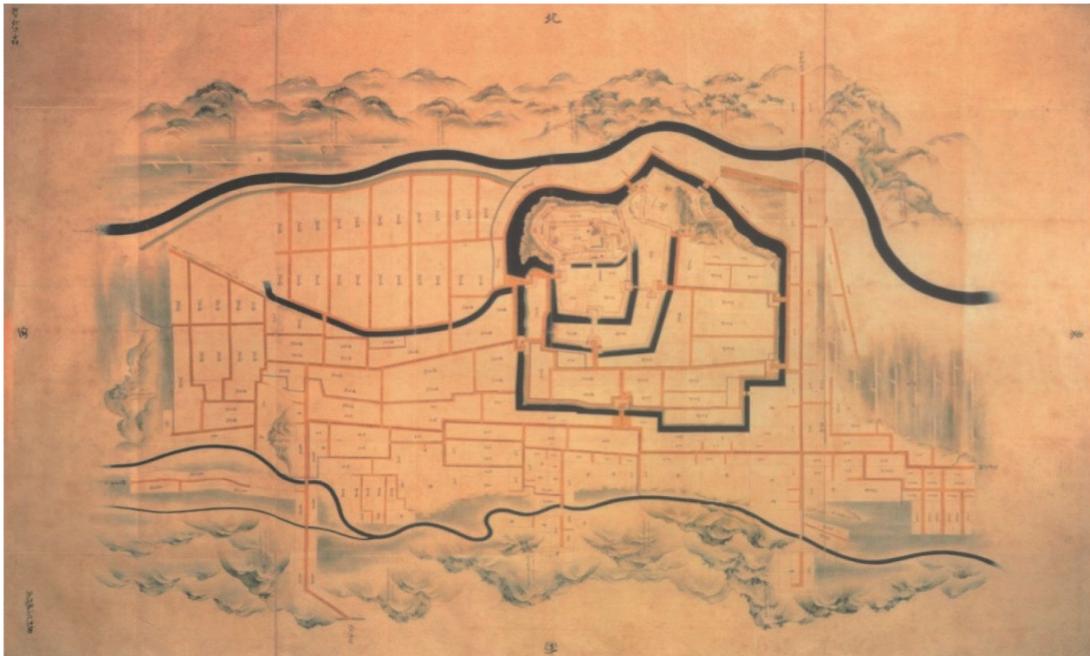
長重は、織田信長の重臣で安土城造営総奉行を務めた丹羽長秀<sup>にわながひで</sup>の子で、豊臣政権下では領地を削減され、関ヶ原合戦で改易されたが、のちに大名として復活して転封を重ね、白河藩に封ぜられた。

長重は、すぐに城郭改修に取り掛かり、約4年の歳月をかけて寛永9年（1632）に小峰城の大改修を完成させた。これにより、小峰城は東北地方にはまれな石垣を多用した強固な城郭に変貌を遂げた。

この改修は、幕府の命であるともされ、「奥州の押さえ」として北の諸大名へ備え、江戸の防衛の一翼を担う重要な地と認識されていたことがうかがえる。

この地理的重要性は歴代の藩主にも認識されており、幕末には戊辰戦争において奥羽越列藩同盟軍と新政府軍が小峰城の掌握を巡って戦いを繰り広げている。

長重は、城下町の町割も行い、城下の水路を設けるとともに、「大工町」<sup>だいくまち</sup>「金屋町」<sup>かなやまち</sup>などの職人に関わる町を置き、現在の白河まで約390年にわたりほぼそのままの形を伝える町割を行った。



奥州白河城絵図（正保城絵図） 国立公文書館蔵



松平定信時代の小峰城 復元CG



木造復元三重櫓・前御門

### ウ 白河藩の歴代藩主と松平定信

丹羽長重<sup>に わながしげ</sup>の死後、嫡子の光重<sup>みつしげ</sup>が家督を相続し、のち二本松に転封されてからは譜代・親藩の大名が封ぜられ、榊原<sup>さかきばら</sup>・本多<sup>おくだいら</sup>・松平<sup>ひさまつ</sup>（奥平）・松平（結城）・松平（久松）・阿部の7家21代の大名が白河藩主を務めた。

歴代藩主は城下の寺社に寄進も行ったが、中でも中世の白河領主結城家の氏神であった鹿嶋神社は尊崇を集め、歴代藩主が寄進を行っている。本多忠義<sup>ほん だ ただよし</sup>は、明暦3年（1657）に城下の総鎮守である鹿嶋神社に神輿を寄進し、現在に続く「提灯まつり（鹿嶋神社例大祭）」の端緒となった。

目まぐるしく入れ替わった白河藩主の中で、最も長い82年（4代）にわたって白河を治めたのが松平（久松）家であり、中でも白河に大きな功績を残したのが松平定信<sup>まつだいらさだのぶ</sup>である。定信は、徳川将軍家の一門、田安宗武<sup>た やすむねたけ</sup>の七男として生まれたが、17歳の安永3年（1774）に白河藩主松平定邦<sup>まつだいらさだくに</sup>の養子となり、天明3年（1783）に家督を相続した。

相続直前より東北地方には「天明の飢饉」と呼ばれる大規模な飢饉が発生したが、定信は米穀の確保などの迅速な対応を図り、領内からは飢饉による餓死者を出さなかったという。文化13年（1816）頃記された自叙伝である「宇下人言<sup>うげのひとこと</sup>」には、「予が領国は死せるものなしといへり。されど餓死せざれども、食物あしくて死せるものはありけんかと思へば、いまでも物くるし」（松平定光校訂『宇下人言・修行録』昭和17年（1942）、岩波書店）と、餓死した者がなかったことに安堵しながらも、食料不足により病気になって死んだ者がいたのではないかと心を痛めている。

このような家督相続当初の難局を乗り切った定信の評価は他藩や幕府にも伝わり、老中田沼意次<sup>たぬまおきつぐ</sup>とその一派の失脚後の天明7年（1787）、老中に抜擢された。翌年には幼い将軍家斉<sup>いえなり</sup>（11代）の補佐も兼ねた定信は「寛政の改革」を行い、幕府の立て直しに尽力した。改革は一定の成功を収めたが、定信は寛政5年（1793）に老中を退き、以後は隠居する文化9年（1812）まで約20年にわたり白河藩政に専念することになる。

## エ 定信の白河藩政

定信は、家督相続直後に家臣・領民に対して儉約を命じるとともに、家臣には武芸を奨励して武備祭（武装して行列し、非常時に備える）を復興した。また、藩校を拡張して「立教館<sup>りつきょうかん</sup>」をつくり、庶民のための学校「敷教舎<sup>ふきょうしゃ</sup>」も城下白河と領内の須賀川<sup>すかがわ</sup>の2箇所<sup>2箇所</sup>に設けて藩校教授や町人に講義を行わせ、人材育成にも努めている。

荒廃した農村の復興にも力を注ぎ、飢饉対策として、米穀を貯蔵させる郷蔵<sup>ごうくら</sup>の設置、人口増加策として間引きの習慣を改めさせた。

また、間引きの影響で領内には女子が少なかったため、越後から女性を招いて資金を支給し、領内の男性と婚姻させた。また、子供が生まれると養育金を支給するなどの対応策の結果、10年で3,500人の人口増の成果がみられた（田内親輔<sup>たうちかすけ</sup>『御行状記料』より「天明五年より寛政四年の領内人口増」『白河市史七』所収）。

諸産業では、専門家を招いて技術を取り入れ、町人に織物や漆器、製茶、和紙、キセル製造等を行わせ、織物等では希望する下級家臣の妻女にも行わせたという。藩領内の商人町である須賀川町（現在の須賀川市）ではガラス製造も行ったと伝えられる（『須賀川市史七』）。

陶器では、白河藩付きの瓦職人を瀬戸などへ修行に派遣し、陶器製造を行わせた。この陶器は藩の献上品などに用いられるようになったという（『白河市史二』）。また、江戸時代初期からと伝えられる馬産（馬市）の規制を緩和して奨励したともいう。

## オ 定信<sup>さだのぶ</sup>の主な文化事業

定信の文化芸術の素養は、和歌や絵画、書、執筆活動をはじめ、茶道、雅楽、国学、蘭学等にまで多岐にわたり、当代一流の文化人としても知られている。

例えば『集古十種<sup>しゅうこじっしゆ</sup>』（全85巻）は、古物の価値を見出し、全国の古器物等を調査して日本初の文化財図録として編纂・出版したものであり、この他にも『古画類聚<sup>こがるいじゆう</sup>』等の古画の研究を行い、焼失した京都御所の調査を実施して古制に則り再建したことは故実研究の成果の一端である。

また、父田安宗武<sup>たやすむねたけ</sup>の雅楽研究を引き継いで研究を行い、楽曲の復古を行ったことも知られ、幕府に関することでは、幕府の公式記録である『徳川実紀<sup>とくがわじつぎ</sup>』、大名、幕臣の系譜集『寛政重修諸家譜<sup>かんせいちゆうしゅうしよかふ</sup>』編纂のきっかけをつくるなど、日本史上重要な文化的事業も多い。

一方、白河藩における文化事業も数多くあげられる。定信は、江戸・国元である白河で合計4箇所の庭園と南湖を築造している。そのうち現在唯一残る南湖は、定信の「士民<sup>しみん</sup>共楽<sup>きょうらく</sup>（武士も庶民も共に楽しむ）」の理念をもとに、大名庭園の要素を取り入れたもので、当時造られた大名庭園と異なり、場所を仕切り、囲む柵が設けられず、いつでも誰でもが利用できる場所であった。

## 第1章

---

また、領内にある<sup>しらかわのせきあと</sup>白河関跡の場所が長い間不明となっていたのを、古文献の調査や古老への聞き取りをもとに現在地が白河関跡であると断定し、あるいは領内の名所古蹟について調査した『<sup>きんじ か ゆうろく</sup>近治可遊録』を編纂させた。さらに、文政元年（1818）には、藩校教授に編纂させた、近世以前の白河の歴史を明らかにする『<sup>しらかわこ じこう</sup>白河古事考』が完成している。



長谷川周春「松平定信像」(部分)  
(白河市歴史民俗資料館蔵)



古関跡碑 (白河関跡、松平定信建立)



白河城三郭御園北面之図模本 (国立国会図書館蔵)

## カ 幕末の白河藩

定信の跡は嫡男の定永<sup>さだなが</sup>が相続し、松平<sup>ひさまつ</sup> (久松) 家は文政6年 (1823) に桑名に転封となった。この転封は桑名の松平<sup>おくだいら</sup> (奥平) 家を武蔵国忍<sup>おし</sup>に、忍の阿部家を白河に移すという、いわゆる「三方領知替」の形であった。白河に入った阿部家は、3代将軍徳川家光<sup>とくがわいえみつ</sup>の時代に阿部忠秋<sup>あべただあき</sup>が老中となって以来、白河に移るまで計5人の老中を輩出した譜代大名の名門であったが、当時は老中の職に昇進する前に死去する当主が続いており、白河転封後にも早世の当主が続き、あわせて財政難や凶作による飢饉などが続いたため、藩主主導により一貫した方針のもとで藩政を行うことが困難であった。

しかし、幕末に一族である旗本阿部家から養子に入り、藩主となった阿部正外<sup>あべまさとう</sup>は、旗本時代には孝明天皇<sup>こうめい</sup>の妹である和宮<sup>かずのみや</sup>と13代将軍徳川家茂<sup>とくがわいえしげ</sup>との婚姻 (和宮降嫁) の御用を務め、直後に神奈川奉行や外国奉行を務めて諸外国の交渉を担当し、その実績が幕府から評価されて元治元年 (1864) 3月、白河藩主阿部家の家督を継ぎ、同家として6人目の老中

## 第1章

となり外国御用取扱を命じられた。そのため翌慶応元年（1865）、米英仏蘭の4カ国が兵庫（神戸）開港を幕府に迫った際には直接交渉を担当し、緊急を要する事態であるために朝廷の了解を得ず、幕府の独断で開港を決断する方向に導いた。

しかし、このことが朝廷の不満を招き、老中罷免・官位剥奪の処罰を受け、蟄居謹慎を命じられて白河から<sup>たなぐら</sup>棚倉への転封を命じられた。

白河はその際に後任の大名が入らず幕府領となり、戊辰戦争勃発後に新政府領となるが、城主がいなくても関わらず、白河は交通の要衝であったため、会津藩や仙台藩を中心とする奥羽越列藩同盟軍と新政府軍による拠点の争奪戦が約3ヶ月にわたって繰り広げられた（白河口の戦い）。その死傷者は1,000人を超え、これは会津戦争の犠牲者よりも多い数であった。

## キ 白河藩領の町と村

江戸時代初期の白河藩領は、現在の<sup>こおりやまし</sup>郡山市、<sup>みはるまち</sup>三春町を含む範囲に及んでいたが、領主の転封が繰り返された結果、また松平（久松）家以降、領地が分散化（他国に飛領が与えられる）し、18世紀中頃には現在の西白河郡・岩瀬郡を中心とする地域に固定化されていく。

地域の支配は、18世紀半ばの松平（結城）家時代を例にとると、月番家老の下、町奉行（寺社奉行兼帯）と郡代奉行があり、郡代奉行の下に郡代元締、その下に代官などが置かれたことが分かる。また、幕末の阿部家時代には、家老の中で郷中用掛家老と勝手郷中用掛家老という支配と財政の2系統の家老の下、地域支配が行われている。一方、町や村には数箇村を統括する大庄屋の下に庄屋（時期により肝煎・名主とも称した）などがいた。

村の支配は代官の下、大庄屋があり、各村に庄屋・組頭・百姓代といういわゆる「村方三役」が村役人として支配の末端を担っていたことが知られる。

町については、江戸時代後期の白河の城下町を例にとると、各町とも町と村との双方の性格を持ち合わせていたため、村方の側面は大庄屋が各町の「年貢庄屋」を支配する形式、町方の側面では町年寄や検断の下に「町方庄屋」が置かれて支配を行っており、各町に2人の庄屋（町方・年貢方）が存在していたことが知られている。

## ク 白河市の周縁地域の歴史

現在の白河市は1市3村が合併して平成17年（2005）に誕生した市であるが、特に江戸時代中期の寛保元年（1741）に越後から白河に移った松平（久松）家が旧領越後に半分近くの領地を残した状態で領地を与えられた関係で、それ以降の白河藩領の中心は白河周辺の郡のみに縮小した。そのため、旧3村にあたる各地域で支配が異なっており、歴史も

異なっている。ここで江戸時代中期以降の各地域の歴史を概観する。

### A おもてごう 表郷地域の歴史

表郷地域は、寛保元年（1741）の白河藩の領主交代でほぼすべてが越後高田藩の飛領となり、陣屋（浅川、のち釜子）の支配を受けた。寛政7年（1795）に高田藩領で勃発した百姓蜂起「浅川騒動」は不満をもつ農民達が神社に結集し、浅川陣屋へ向かった騒動である。表郷地域でも騒動に参加した村々の百姓に首謀者がおり、捕らえられて処罰されている。その後、文政3年（1820）に一部が幕府領となって幕末を迎えた。

幕末には戊辰戦争の戦いが白河に迫り、新政府軍が小峰城を押さえ、戦力を増強してくると<sup>たなぐらじょう</sup>棚倉城への攻撃が開始され、白河から棚倉への街道筋にあたる表郷地域は列藩同盟軍と新政府軍の最前線として戦場となり、双方の軍から物資・資金供出を求められ、戦闘時に家が新政府軍の各藩の宿営になり、あるいは人夫としてかり出された者が戦闘時の流れ弾により死亡するなど、戦いに巻き込まれている。



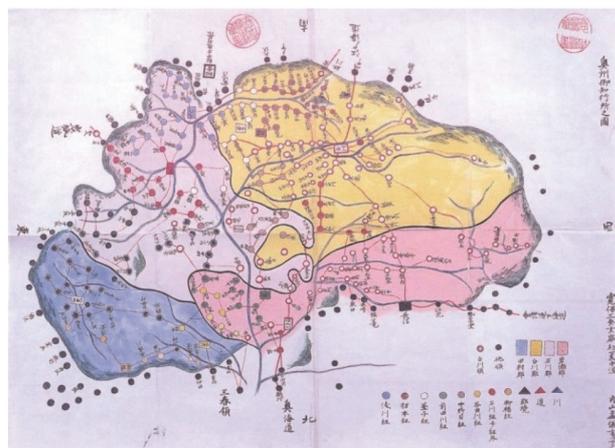
「長州七番隊二分隊」の墨書のある木箱（白河市歴史民俗資料館蔵）

### B たいしん 大信地域の歴史

大信地域についても寛保元年（1741）の白河藩の領主交代で高田藩領と白河藩領に分かれたが、多くはそのまま白河藩領であり、一部が高田藩領、そして幕末に幕府領になっている。

白河藩阿部家が棚倉に転封となったのちは、白河藩領は幕府領となったので、大信地域の旧白河藩領も幕府領に編入され、代官の支配に置かれた。

寛政7年（1795）の「浅川騒動」における同地域の高田藩領の村々の百姓による蜂起は確認されていないが、駒付役を務めていた<sup>なかしんじょうむら</sup>中新城村の<sup>こばりじゅう</sup>小針十次右衛門宅が一揆勢の襲撃を受け、諸道具はもちろん、柱の所々を大斧で切られたり、庭木も散々に切られたりと多大な被害を受けている。その上に騒動の一因が襲撃された大庄屋・駒付役



「奥州御知行所之図」（上越市立高田図書館蔵 榊原文書『大信村史』資料編（上）より）

## 第1章

等への不信にあるとして、役職を更迭されている。

幕末の戊辰戦争においては、白河・会津街道（白河～会津若松）が大信地域を通過していたため、奥羽越列藩同盟軍の最前線として、仙台藩や会津藩など各藩の本営が置かれた。そのため物資調達や輸送への協力を求められたほか、進撃してくる新政府軍との戦いに巻き込まれた。

### C <sup>ひがし</sup>東地域の歴史

東地域は、寛保元年（1741）の白河藩の領主交代で全村が白河藩領から高田藩領に移管され、浅川陣屋（浅川町）の支配を受けることとなった。寛政7年（1795）の「浅川騒動」では首謀者の多くは東地域の百姓であり、その一人半十郎は藩より最高指導者とされ、唯一打ち首に処せられている。

高田藩は越後の居城（高田城）周辺の領地よりも、奥州の飛領の方が石高が多いという変則的な領地支配であったため、騒動をきっかけとして居城周辺の領地を増やすことを幕府に嘆願し、文化6年（1809）に村替えに成功している。この際に陣屋のあった浅川が幕領となったため、陣屋を当地域の<sup>かまのこ</sup>釜子に移し、「釜子陣屋」が成立した。陣屋は藩領の40箇村を支配し、釜子村は地域の中心として栄えた。

戊辰戦争では遠隔地にあった本領高田との意思疎通が図れず、陣屋詰めの藩士は藩の新政府軍への帰順の方針に反し、周辺の藩と連携を取り奥羽越列藩同盟に与した。藩士は会津や白河、棚倉などに出兵している。その後、新政府軍の攻勢にともない、陣屋も攻撃を受けて陥落したが、藩士達は会津に逃れて戦いに参加し、一部の藩士が戦死している。

### ケ 近現代の白河

戊辰戦争の戦乱を経て明治維新を迎えた白河とその旧藩領は、明治2年（1869）8月に「白河県」が発足するまでの約1年間、下野国の諸藩や白河に隣接する守山藩の臨時行政機構による支配が行われた。

明治2年（1869）6月には版籍奉還が実施され、旧藩主は「知事」に改めて任命されている。藩領でない白河には同年8月、白河県が発足した。管轄は9郡361箇村に及ぶもので、県庁は町役人宅や寺院を使用し、のちに旧小峰城内に新築されている。

しかし、明治4年（1871）には早くも白河県は二本松県に吸収合併され、直後に福島県に合併された。



長伝寺（東釜子）にある戊辰戦死者の「忠干碑」

なお、この時期の明治4年（1871）8月、旧城下の本町には日本でも早期に入る県立白河病院と医学講義所という病院と医学校が開設されている。しかし、合併による白河県の消滅や他所からの誘致運動があり、明治5年（1872）2月には閉院し、わずか半年という短期間の運営で終わった。

明治10年（1877）代に全国的規模で広がった「自由民権運動」は、福島県では三春の河野広中が中心となって運動を繰り広げ、田村郡や耶麻郡が活動の中心となっていた。西白河郡や石川郡、河沼郡、安達郡は、それに次ぐ運動の盛り上がりが見られた。また、白河は県境の重要な街道の交差する地であったため、自由民権運動を抑えようとする権力側にとっても重要な場所となっていた。

白河では代言人（のちの弁護士）が自由党の側に立って活躍し、草間昇や阿部又郎、伊藤庄蔵など、20歳を超えたばかりの青年たちが活動していた。また、河野らを援助した自由党の人物には、白坂宿から出た県議・白坂庫太や道場小路で医院を開業していた赤坂多計乎などがいた。また、白河の商人たちも自由党に協力していたとされ、桑名清兵衛や安田新助、常盤叡太郎、小林権右衛門らが警察によって検挙・拘留された。

明治22年（1889）4月には、町村制施行により「白河町」が成立した。当時の町の人口は約1万1,000人であった。同時に表郷地域には金山村・社村・古関村が、大信地域には信夫村・大屋村が、東地域には小野田村・釜子村がそれぞれ合併により誕生し、のちの白河市合併の前身となっている。



南湖駅に停車中の白棚鉄道の列車  
(大正～昭和初期の絵はがきより)

交通に関しては、明治20年（1887）7月16日、黒磯一郡山間に鉄道が開通し、上野と白河が約6時間半で結ばれた。この開通は、同年に見られた皆既日食（おおむね関東甲信越・東北南部地域）の1ヶ月前にあたった。国家的な事業として取り組まれたこの観測は、鉄道の開通により、大型機材を持ち込んだ外国からの研究者も訪れ、見物人も多数来て賑

わったという。

大正5年（1916）には白河と棚倉を結ぶ私鉄「白棚鉄道」が開通し、石川町までを結ぶ磐城鉄道も計画されたほか（未開通）、国道4号などの道路による交通網が整備されていく。しかし一方で、旧奥州街道沿いの宿場は、急速に通行量が少なくなっていく。

白河の中心的な商工業については、製糸業があげられる。明治20年（1887）に白清館と小峯館の製糸会社が創業し、明治から大正を経て昭和初期の白河の工業を牽引している。

また、白河では藩政時代から馬市や馬せりが盛んであり、明治9年（1876）に行われた明治天皇の奥羽巡幸では、小峰城跡で「産馬天覧」が催されている。

白河で全国的に著名であったのは売り馬喰と買い馬喰の直接交渉が行われる「馬市」である。町は大正3年（1914）に馬市場を町営とし、馬で有名な奥州の最南端の市場として盛んであった。取引量は最盛期には1万頭にもものぼり、全国に商圏が展開していたことが知られる。



明治9年（1876）産馬天覧の様子（個人蔵）



馬市の様子（昭和32年（1957））（個人蔵）

なお、活況を呈した白河の馬市であったが、第2次大戦後の農業の機械化やモーターゼーション等による馬産の衰えにより、昭和39年（1964）をもって幕を閉じた。

明治末から大正期にかけては、日露戦争における講和条約締結の反対運動や民主主義運動（大正デモクラシー）が全国的展開を見せたが、白河においても明治38年（1905）9月、講和反対の集会が小峰城跡で3,000人を集めて行われたほか、普通選挙獲得運動では、大正9年（1920）7月に尾崎行雄や河野広中などを招いて岩瀬郡・東白川郡・西白河郡の選挙民を中心に開催されている。その後、大正14年（1925）に普通選挙法の改正（25歳以上の男子に選挙権を与える）が行われ、西白河郡では改正直後に約4,000人だった有権者が、昭和3年（1928）には1万3,000人余りに増加している。

また、大正7年（1918）に富山県から全国に波及した米騒動は白河でも発生したが、白河町の対応により米の廉売を実施し、騒動は拡大せずに鎮静化するに至った。なお、行政では大正末期の大正12年（1923）に郡制が廃止され、大正15年（1926）に郡役所が廃止されている。

昭和期は金融恐慌より始まり、白河でも明治末期に設立され、大正の経済好況期に成長した地元資本の4つの銀行のうち、3つが解散に追い込まれ、有力商家も没落して白河を去る家が現れている（『白河を駆け抜けた作家たち』平成7年（1995）、白河市歴史民俗資料館）。

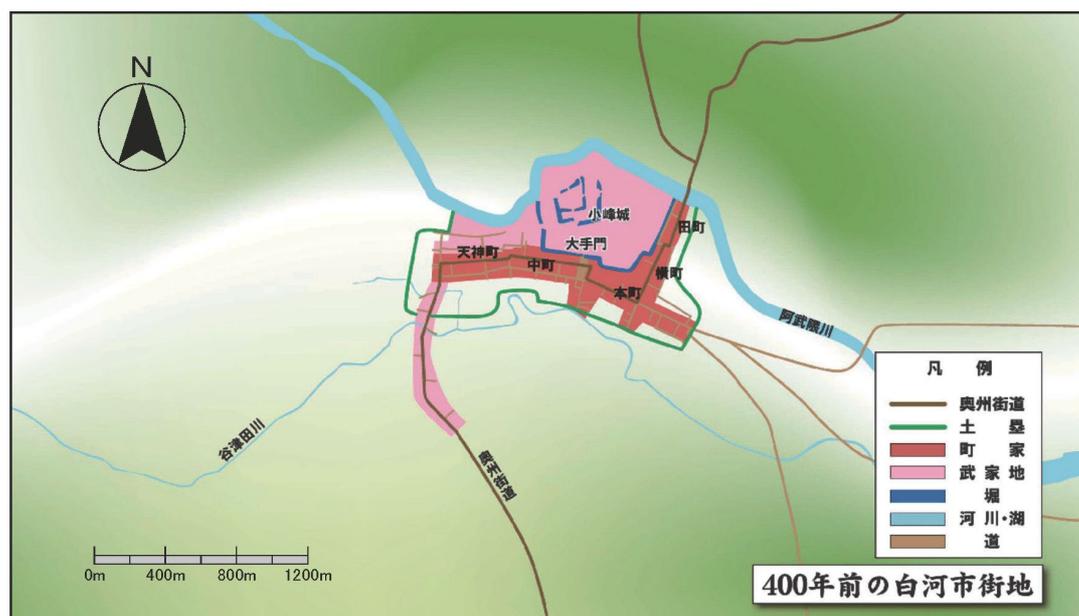
この恐慌によって、裕福な商家を中心として芽生えていた白河の文化的な動きも、有志が所蔵品を持ち寄り開催した絵画展覧会や中央の画家への資金援助などの縮小や中止により、白河の芸術文化も大きく打撃を受けた（前掲『白河を駆け抜けた作家たち』、『文化の力』平成21年（2009）、福島県立美術館）。

こうして白河も戦時体制に突入していく。戦時中、白河は空襲被害を受けることはなかったが、勤労働員の白河高等女学校（現・県立白河旭高等学校）の生徒14名が郡山空襲で多数犠牲になった出来事や、学校での航空機部品製造に従事した体験が伝えられている。また、西白河郡で戦争に召集され、戦死したのは2,700人余りにのぼった。

## （2）都市形成の歴史

日本では戦国時代末期に戦国大名によって、武士・商人・職人を城下町に集住させ、城の防衛機能と共に行政都市・商業都市としての機能を持つ近世都市（城下町）が建設された。現在の主要地方都市のルーツは、ほぼこの時に始まっている。白河市の市街地も、「白河城之図（慶長古図）」（宮城県図書館蔵）によれば、少なくとも今から400年前の慶長年間（1596～1615）に、小峰城とともに城下町が形成され、都市としての歴史を確認することができる。

### ① 中世末期の小峰城下



白河という都市は、那須連峰を源とする阿武隈川とその支流である谷津田川に挟まれた東西に細長い地形上に築かれている。

「白河城之図」によれば、慶長6年（1601）頃すでに小峰城とその城下町が奥州街道沿いに形成されていた。歴史文献上における白河という都市の誕生である。阿武隈川の流れは現在の会津町の南側と東側を流れ、小峰城は阿武隈川を背に本丸・二之丸・三之丸が配置されていた。奥州街道沿いの城下・町屋群は、城をカギ型（稲妻型）に取り囲むように

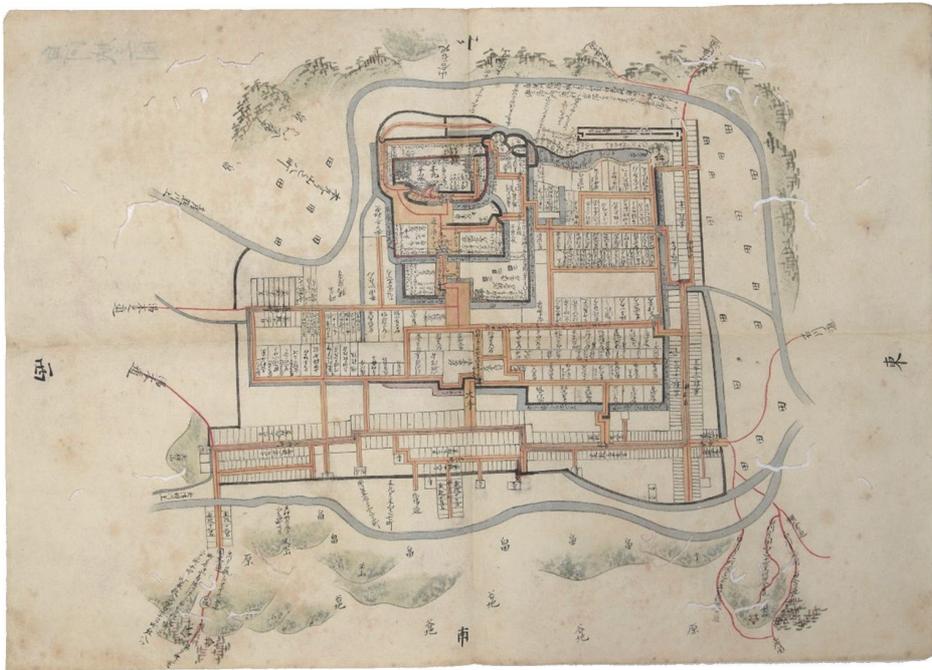
## 第1章

築かれており、天神町・中町・本町・横町・田町等の城下通り五町の骨格的町屋が成立している様子を知ることができる。また、慶長古図には、城下を取り囲む土塁が確認され、慶長年間（1596～1615）の城下は総構えとして機能したことが確認でき、その総構えは戦国時代の領主である白河結城家時代まで遡る可能性も否定できない。

城下は、生産手段を持たない武士が、食糧などの生活物資を供給する商人や職人を城下町に住ませることによって成立していったのである。

このように、白河という都市は少なくとも今から400年前には現在の原型が整えられている。

## ② 近世の小峰城下



白河城之図（慶長古図）宮城県図書館蔵

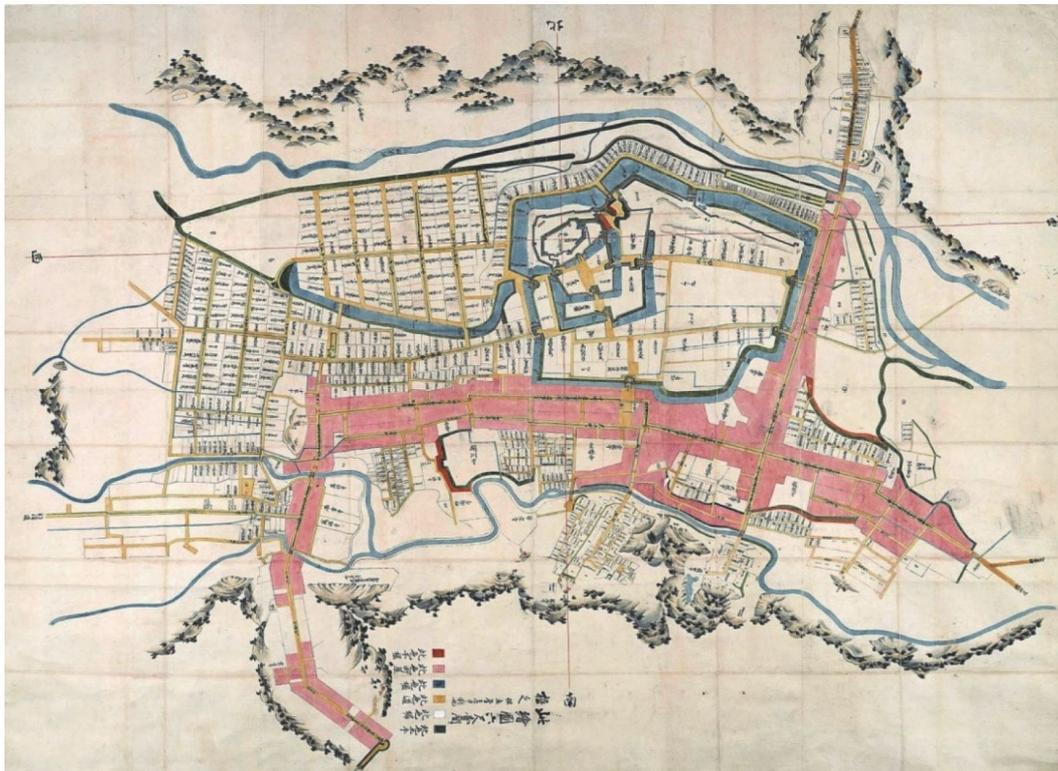
寛永4年（1627）に白河藩が成立し、初代藩主となった丹羽長重<sup>にわながしげ</sup>は、小峰城の大改修とともに城下町（町屋）の再整備、阿武隈川<sup>あぶくまがわ</sup>の付け替え、奥州街道のルート変更（南側）など、現在の中心市街地の基礎を築いた（『白河市史二』）。元禄年間（1688～1704）になると、城下町の人口増加に対応するため、城下の谷津田川<sup>やんたがわ</sup>沿いにある南町<sup>みなみまち</sup>の町屋造成（「文政年間宿明細帳」個人蔵）や新町<sup>しんまち</sup>足軽屋敷の町屋への用途変更を行ったと推定される（「陸奥国白河城下絵図」鎮國守國神社蔵、『白河市史二』所収）。以後、明治維新（1868）までの240年間、小峰城と城下町はほぼ変わることなく、西白河郡や石川郡、岩瀬郡など白河藩の政治経済の中心都市としての役割を担った。天神町、中町、本町、横町、田町の

とおごちよう  
通り五町を中心とした町屋は、武家地や周辺農村の人々の暮らしを支える商工業の集積地として繁栄し、中でも酒造・味噌・醤油などの醸造業は、江戸時代後期の町絵図の職業記載を見ると、各町に数軒ずつ存在するほか、現在につながる系譜を持つ店もあり、それだけの消費が城下及び周縁部にあり、事業として長期に存続が可能であったことを示している。

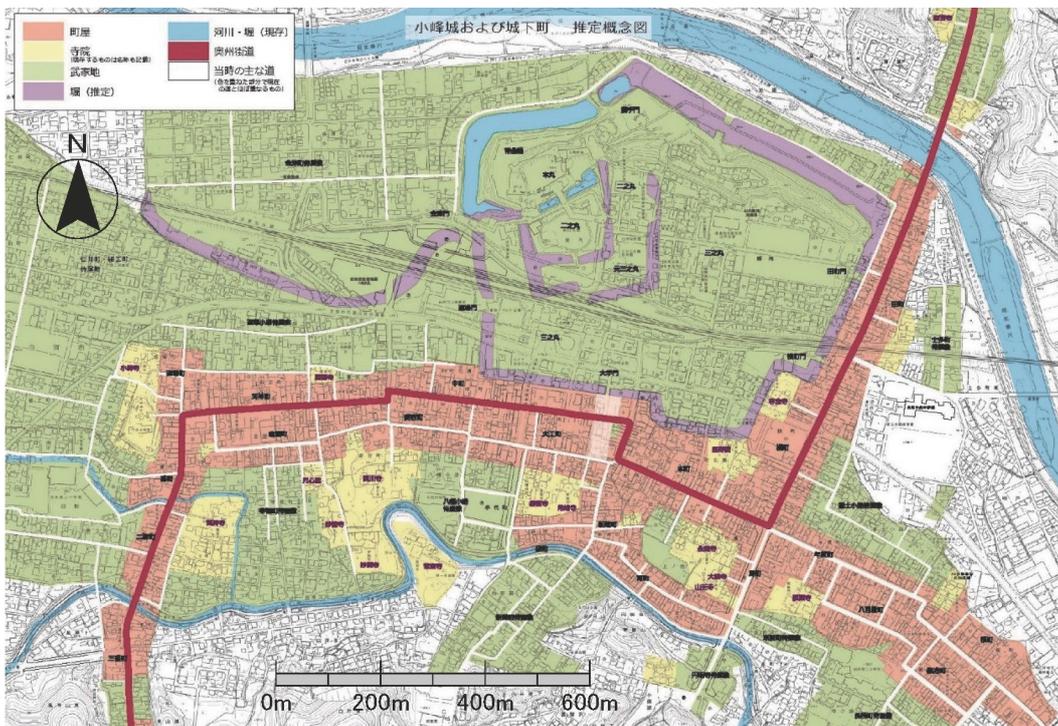
寛文5年（1665）の城下町人口は、町人人口が7,500人（「寛文五年宗門御改町中人高目録」個人蔵、『白河市史六』所収）、武家人口もほぼ同数と推定すれば、約1万5,000人程度と類推される。通り五町の町屋には白河藩内で生産された物資が集まり、定期的に「六斎市ろくさいいち」が開かれていた。六斎市は、月6回開催され、4日（本町と横町が月替わりに開催）、5日（横町）、14日（本町）、19日・24日・29日（天神町てんじんまち）の6回で開かれていた（『白河市史 九』）。六斎市は武家や町人、周辺農村の人たちで賑わっていた。現在の「だるま市いちがみさい（市神祭）」は、この六斎市が由来となっている。六斎市の年の初めの市が「市神祭いちがみさい（様）」（『白河風土記』）として中町なかまちの高札場の側に市神を祀り盛大に開催され、白河だるまなどをはじめとした縁起物が売られた。

白河提灯まつりの起源も江戸時代初期の明暦年間（1655～58）であり（『白河風土記』）、鹿嶋神社神輿が桜町さくらまちの御旅所おたびしょに遷座し、旧暦の7月6日から8日までの3日間、城下の総町を神輿渡御が行われ、現在まで約350年間にわたり開催されており、地域のコミュニティを高める場ともなっている。





奥州白河城下全図（市指定重要文化財 白河市歴史民俗資料館蔵）



城下町推定概念図

## ③ 明治期の白河市街地

明治元年（1868）、戊辰戦争により小峰城の一部が焼失し、武家屋敷地も田畑へと変化し町屋だけが残された（明治20年（1887）8月測量地図）。同年には、現在の東北本線が開通し、旧小峰城を南北に分断する形で、旧三之丸に白河駅が設置された。これにより、奥州街道沿いを中心とする都市構造から、東北本線白河駅を中心とする都市構造に変化していった。駅舎が中町と本町に隣接して設置されたため、江戸時代の城下町がそのまま近代都市白河の中心市街地となっていた。陸羽街道（国道4号）は、旧奥州街道から西側の旧原方街道はらかたかいどうに変更される。明治22年（1899）には、白河町として町制が施行され、旧小峰城内には白河町役場なかまち（中町）や裁判所かくない（郭内）、郡役所どうじょうこうじ（道場小路）等の公共施設が設置されていた。また、白河小学校はちまんこうじ（八幡小路）も明治19年（1886）に創立された。

鉄道開業により、徒歩や馬などの陸路輸送から鉄道輸送へと変化していき、明治42年（1909）には白河電灯株式会社が設立され、各家庭に電気が灯るようになる。明治43年（1910）には電話も開通し、人々の営みも除々に近代化していくことになった。





「福島県磐城国西白河郡白河町」地図  
国土地理院蔵



明治17年（1884）頃の本町  
（『写真でみる白河のあゆみ』所収）

## ④ 大正・昭和初期の白河市街地

大正5年（1916）、白河町と棚倉町を結ぶ<sup>はくほうてつどう</sup>白棚鉄道が開通した。大正10年（1921）には東北本線も築堤の上を走る大規模な付け替えが行われ、白河駅舎も現在の地に新築された。これにともない、小峰城跡二之丸・三之丸の堀や、石垣が埋め立てされていく。また、市街地から南湖公園に通じる道路も整備された。この頃、市街地の東端に白河高等女学校（現在の白河旭高校）、西端に白河中学校（現在の白河高校）が設置される。市街地も郭内や昭和町、旭町などに少しずつ広がっていく。

また、昭和初期には戦時体制の波が白河にも押し寄せ、<sup>ゆうげつざん</sup>友月山に防空壕が設けられている。



昭和初期の本町の様子（個人蔵）

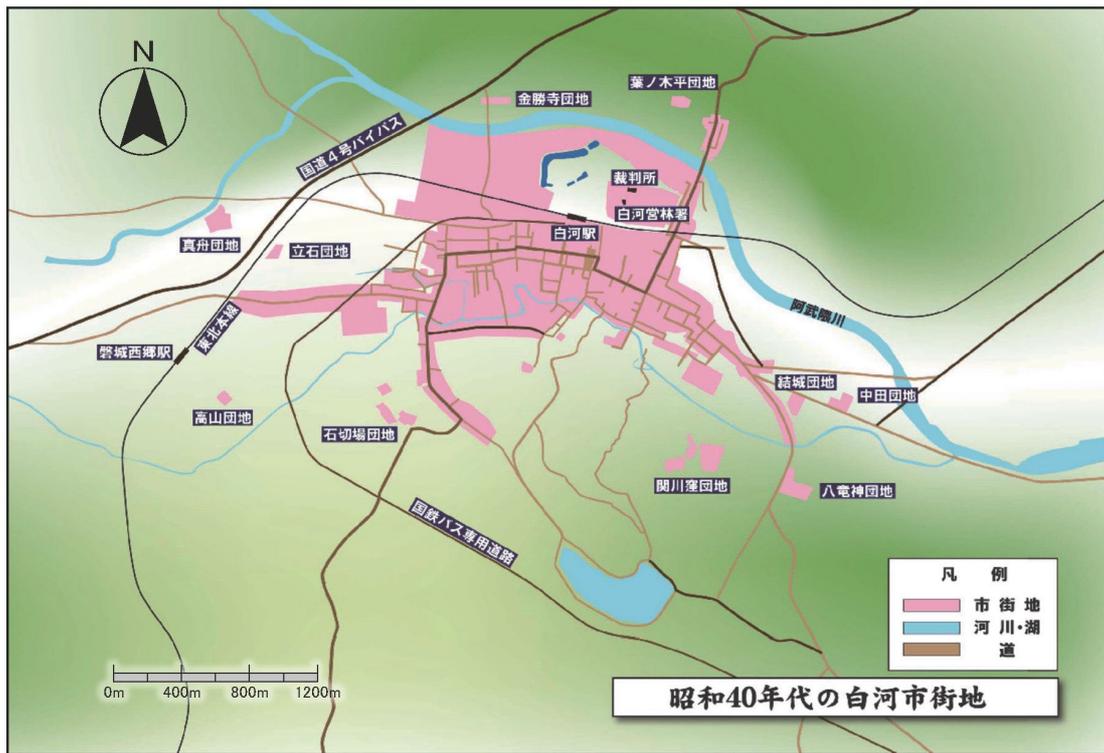


昭和初期の白河駅前の様子（個人蔵）

⑤ 昭和40年（1965）前後の白河市街地

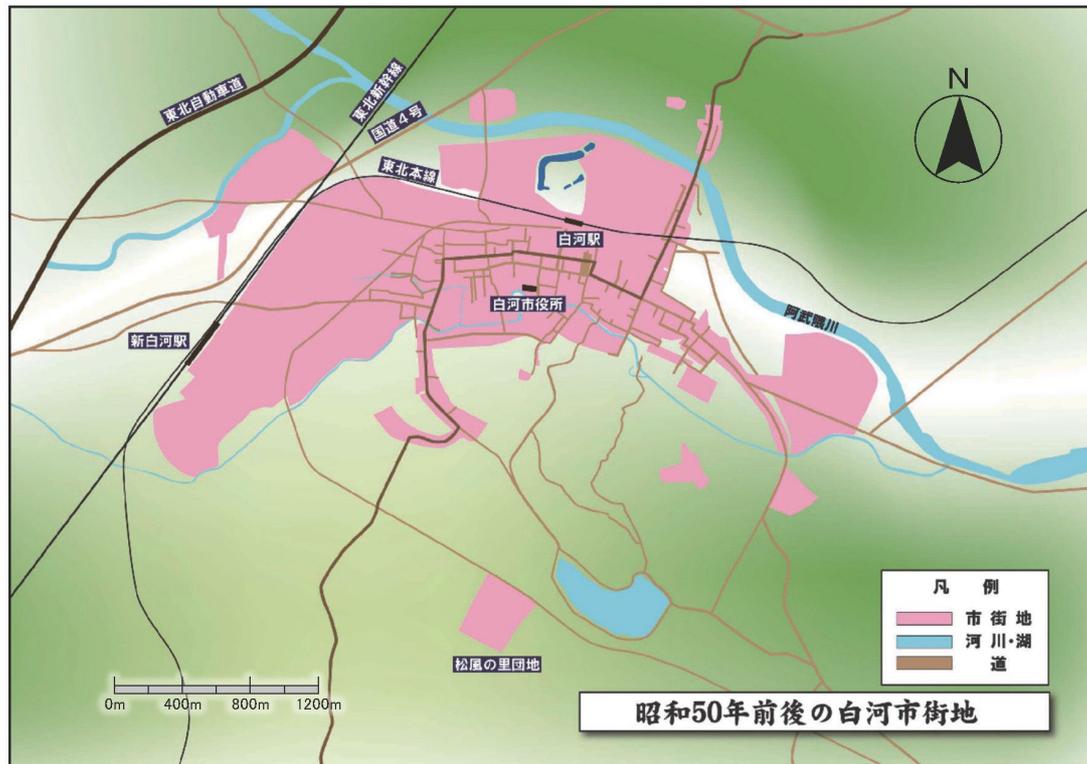
昭和36年（1961）頃、中心市街地を通過していた国道4号のバイパス道路が市街地の北側に開通した。また、戦時中に白棚鉄道が休止となり線路が撤去されたことで、戦後には日本初のバス専用道路となり、モータリゼーションの波が白河にも押し寄せてくる。これにともない、白河駅を中心とするバスによる公共交通網が周辺地域へと細かく結ばれていった。また、市街地部の人口増加にともない、郊外の会津町、金勝寺、八竜神、関川窪、石切場、昭和町などに市営住宅の整備が行われていくことになる。昭和40年（1965）の旧城下町エリアの人口は、約1万5,300人である。

昭和39年（1964）、自家用車や農業機械の普及などにより、江戸時代以来盛大に行われてきた白河馬市が廃止された。翌年には東京オリンピックが開催され、「三種の神器」（テレビ・洗濯機・冷蔵庫）と呼ばれた電化製品が普及、上水道も整備されるなど、生活様式の変化が進み、中心市街地には十字屋（昭和36年（1961））、イトーヨーカ堂（昭和45年（1970））などの大型店舗などが開店していった。



## ⑥ 昭和50年（1975）前後の白河市街地

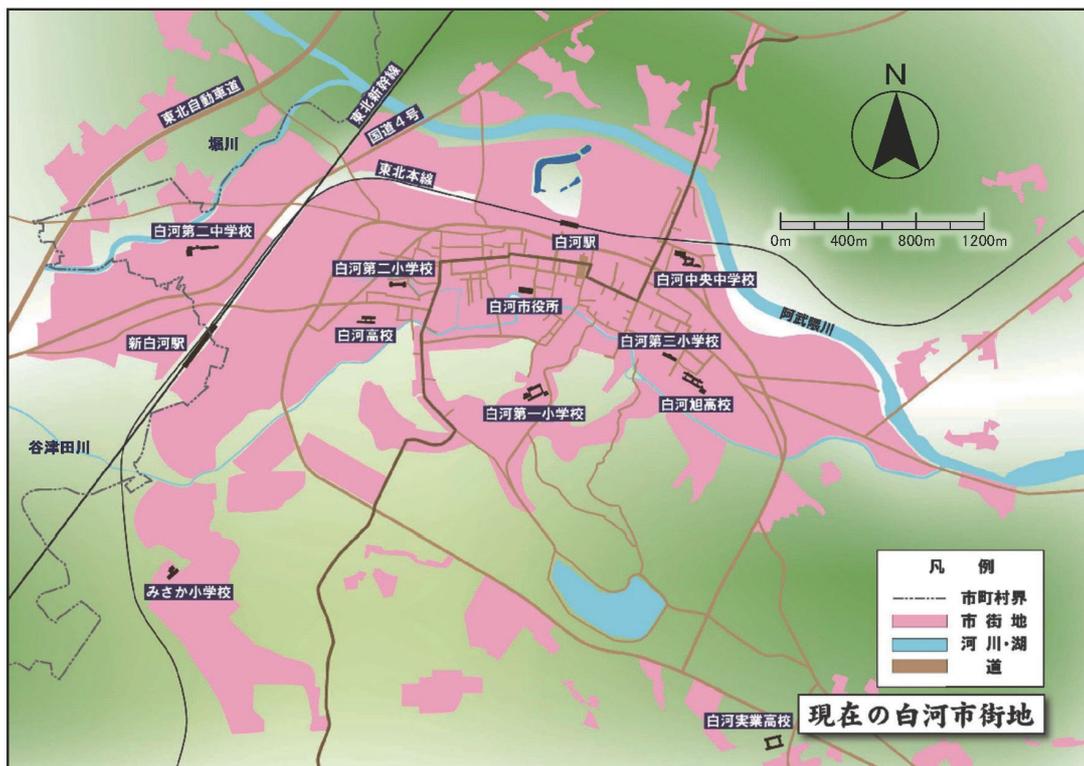
昭和48年（1973）に東北自動車道が開通し、西郷村に白河インターチェンジが設置され、昭和57年（1982）には東北新幹線開業にともない新白河駅が市街地西側に開業し、高速交通時代に入る。これにともない、市街地も西側に大きく拡大、郊外の市営住宅も高層化していき、その周辺には宅地需要の高まりを背景に宅地化が進んだ。昭和50年（1975）の旧城下町エリアの人口は、約1万3,100人である。



⑦ 現在の白河市街地

平成10年（1998）に市街地を取り巻く環状道路が完成し、新白河駅前や南湖上流地区の市街地化が目立ってくる。また、ニュータウンの開発や工業団地に企業立地が進む一方、400年の歴史を持つ中心市街地では、人口が減少し、空き店舗などが増加していく。さらに本格的な人口減少時代に突入した現在では、郊外部も含んだ都市全体がスポンジのように空洞化していく傾向がみられる。現在の市街地の都市構造は、環状道路を中心に、白河駅前地区、新白河地区、南湖公園地区の3つの部分を核として成立しており、現在の白河市の都市構造の大きな特徴となっている。

また、大規模な災害とは無縁であった白河市に、平成10年（1998）8月27日未明に未曾有の大水害（8.27水害）が起こり、堀川や谷津田川が氾濫し深刻な被害がもたらされた。その後、河川激甚災害対策特別緊急事業が採択され、河川改修事業が行われたことにより、谷津田川は市民に愛される憩いの水辺空間になった。



## (3) 白河ゆかりの人物

## ① 結城親朝

下野国の小山氏の一族である下総結城家が源頼朝から白河と周辺地域を与えられたが、その一族が白河に移住し白河結城家として成立し、鎌倉時代後期から戦国時代の白河を治めた。

結城親朝は、白河結城家の祖・結城祐広の孫にあたり、興国～正平年間（1340～1369）、白河結城家の分家である小峰家を創設し、現在の小峰城跡（国の史跡）の端緒となる城郭を小峰ヶ岡と称される丘陵に築いたと伝えられる。

## ② 丹羽長重【元龜2年（1571）～寛永14年（1637）】

織田信長・豊臣秀吉に仕えた丹羽長秀の子として元龜2年（1571）に岐阜で生まれた。15歳で父・長秀が没した後は越前・若狭両国と加賀・近江123万石を継いだ。天下を取った豊臣秀吉の勢力削減策により、二度に渡り石高を減らされた。そして、「関ヶ原の戦い」の直前、前田利長（徳川方）と争い、徳川家康に城地を没収された。

家康が征夷大將軍となり徳川幕府が成立すると、常陸国古渡1万石を与えられて大名に復活し、2代將軍秀忠の信頼を得て、奥州棚倉に移封、棚倉城を築城したが、完成を見ないまま白河へ移封し、初代白河藩主となった。

白河入封後は、直ちに侍屋敷の拡張を行い、その後小峰城の大改修に着手した。城下町の改修・整備なども行い、現在の白河市街地の基盤を築いた。



「丹羽長重像」(部分)  
(白河市歴史民俗資料館蔵)

③本多忠義【慶長7年（1602）～延宝4年（1676）】

播磨姫路藩主・本多忠政の三男として生まれ、大坂の陣にも若年で加わった。寛永3年（1626）、忠政が病没すると遺言により、播磨国のうち4万石を分与され、寛永8年（1631）には兄・忠朝から1万石分与され、都合5万石を与えられた。その後幾度かの転封を経て、慶安2年（1649）、越後村上から白河に入封した。明暦3年（1657）、白河の総鎮守・鹿嶋神社に鹿嶋神社神輿（市指定重要文化財）を奉納。隔年で9月に開催される「提灯まつり」は、この神輿の寄進により始まったと伝えられている。



本多忠義「山水図」  
（白河市歴史民俗資料館蔵）

④松平定信【宝暦8年（1758）～文政12年（1829）】

8代将軍徳川吉宗の二男田安宗武の子で、吉宗の孫にあたる。「天明の大飢饉」があった天明3年（1783）に家督を継ぎ、白河藩主に就任。この凶作を乗り切るため、各地から米穀を買い入れ、藩内の裕福な町人や農民に対し、生活が苦しい者に米を寄付することを奨励し、その被害を最小限に食い止めた。



長谷川周春「松平定信像」(部分)  
（白河市歴史民俗資料館蔵）

白河藩政の手腕が評価され、天明7年（1787）に幕府の老中首座に就き、「寛政の改革」を行った。老中を辞任すると再び白河藩政に専念し、労働人口を増やす政策を積極的に行い、南湖の築造や新田開発も行うことで、農民を救済した。

また、農業だけではなく、諸産業の育成にも力を入れ、織物や漆器、陶器、製茶、和紙、酒造、馬産、植林など、さまざまな産業を育成した。

## ⑤谷文晁【宝暦13年（1763）～天保11年（1840）】

江戸時代後期の日本画家で、丸山応挙・狩野探幽とともに「徳川時代の三大家」に数えられている。文晁は、松平定信の生家・田安家の家臣だったが、寛政4年（1792）、幕府老中在任中の定信付きの家臣となった。

文晁は、定信の命により「集古十種」や「古画類聚」の編さんに携わりながら、亜欧堂田善や大野文泉など、白河藩や周辺の絵師たちの指導や育成を行った。

文晁も定信に従って何度か白河を訪れ、アトリエ「小峰山房」を構え、活動した。定信が小峰城内の三之丸に築造した庭園「三郭四園」を描いた作品が白河に伝わっている。（右図）

また、白河だるまの意匠は、文晁が下絵を与えたものがルーツだといわれ、市神祭（旧正月14日の初市）で売られる縁起物として名を広めた。市神祭は、現在「だるま市」と名称を変えて行われている。



谷文晁「楽翁公白河御下屋敷真景図」  
（白河市歴史民俗資料館蔵）